

---

# 過ちのライゼ

小鳥遊奈鳥。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過ちのライゼ

### 【Nコード】

N9673Y

### 【作者名】

小鳥遊奈鳥。

### 【あらすじ】

十三年前のある日、突如世界を闇で覆った日 通称、黒昼の日。その日を境に世界では能力に目覚める人間が出てきた。しかし、人智を超えた能力を持ったがために忌避されたり差別されたりする能力者たち。そうならないように能力を万人のために生かす神雑学園能力運用部の面々。四月も半ばの頃、一人の男子生徒が神雑学園に転入してきたことで物語は動き始める。学生らしい日常や能力者としての葛藤を描いた能力者系学園モノ。

## プロローグ（前書き）

来年、どこかの出版社に応募しようと思って書き温めていた“過ちのライゼ”ですが、まア現実的に考えて無理だよな……就職するし。

ということとでせっかく書いたんだから小説家になろうへ投稿することにしました。

たくさんの方の目に触れてもらえたら嬉しいです（\*、\*、\*）

twitterやってます。

ユーザー名はtakanashin|natorです。

更新情報や執筆状況などをつぶやいていきたいと思えます。

他にも小ネタや裏話、他諸々をつぶやいていきたいです。

<http://twitter.com/takanashin|nator>

感想に評価、誤字脱字の報告などお待ちしております。

## プロローグ

世界は理不尽で満ちている。それは、どこの誰が言ったのだろうか……

その言葉を聞いた時はそんなことはない、世界は案外悪くないものだと思えた。家はごく一般的な家庭よりもちよつとだけ裕福で、父と母と兄との四人暮らし。それなりの年頃らしく学業に部活、恋に興味にと、ちよつと満足いかない時はあつても、充足した日々だった。

けど、世界は理不尽で満ちていると言つのはこの世界の真理なのだろう。

不幸は誰にでも突然襲い掛かるものだ。と、テレビで言っていたけど、それが自分の人生に当てはまるとは思わずに生きてきた。

ニユースキャスターが毎朝届ける不幸な出来事を尻目に学園へと登校するように、同じ日本での出来事もどこか遠い世界で起きることにのよつと感じていた。

身近な人が事故で亡くなるのも家族の手で殺されるのも、それが自分にもいつか訪れるかもしれないと全く思わなかったわけではなけれど、それでも、やっぱりそんないつかは訪れずこともなく、私は平々凡々に生きていくのだろうと思つていた。

それが壊れたのはいつだろう……

父が一番の親友だと思つていた人に騙され、全てに絶望し、楽に

なるためにと自殺した時から？ 母が全てに嘆き、得体のしれない宗教を心の拠り所に信奉し始めた時に？ それとも兄が全てに憤怒し、世間では許されない行為に走った時？ もしかしたら私が

……いや、どれも違う。きっと私が生まれる前からこの世界は理不尽で壊れていたのだろう。

それでも私はこの理不尽で壊れた世界から父や母、兄のように逃げたりすることも出来ずに、ただ自分に嘘を吐いて生きていく。

人から見ればそれも逃げていることになるのだろうけど……

くるり、くるり。

過去が回る。

「最悪な目覚めだわ……」

のっそりと体を起こした少女は、枕元に置いてあった携帯電話を開いて日付と時刻を確認する。

四月十五日の月曜日。時間は六時十五分。

いつも起きる時間よりいくらか早い目覚めに少女は目を細める。

「……ああ、そういえば今日であれから一年が経ったのね……通りで夢見が悪いはずだわ」

一年前の四月七日に少女

真崎空音が信じてもない神から、

要りもしない傍迷惑はためいわくな能力に目覚めさせられた日。

そして、それは……空音が嘘を吐き始めた日でもある。

「はあ……」

空音は携帯電話のアラーム機能を消してベッドから起き上がると、着ていた寝巻をベッドに投げ捨て、栗色の髪の毛を靡なびかせて浴室へと歩いて行った。

窓の外の天気は快晴。

それは空音の心情とは全く逆の空模様だった。

「ようこそ、神薙学園高等部へ。俺はお前が転入する二年A組の担任の来栖川だ。担当教科は生物。それからお前が入部する予定の能運部の顧問でもある。よろしく」

白衣を着た来栖川は手元の書類を眺めながら投げやりな態度で歓迎と自己紹介をする。

「能運部？」

真新しい制服を着た少年 上倉久遠は聞き慣れない単語に首を傾げる。

「ん？ 能力運用部に入部するのがこの学園に入る条件の一つだけだろ」

能力運用クラブ。略して能運部と呼ばれていることを理解した久遠は頭を頷かせる。

「ああ、はい。よろしくお願いします」

来栖川は手元の書類を机の上のバインダーに綴じると席を立った。

「ああ……これからA組のホームルームだから適当に自己紹介を考えておけ」

そして、スタスタと扉の方へと歩いていくので、久遠も後を付いていく。

校舎内はホームルーム前ということもあってどこか騒がしい。

階を一つ上がり、二年の教室がある三階に来る。神薙学園では廊下側一面が窓のようで教室内の生徒達からの視線が廊下を歩く久遠たちに注がれた。

若干の居心地悪さを感じた久遠はそれを紛らかすように、扉の上にあるプレートに視線を向けると、そこには二年F組とあるので、普段見慣れない生徒が教師と歩いているので珍しがっているのだろう。

久遠がそんなことを考えていると来栖川の足が止まった。視線を

扉の上のプレート向ければ二年A組の文字。どうやら碌ろくに自己紹介を考えないまま、教室に着いてしまったようだ。

教室内では教室の外に来栖川が来たことに気付いた生徒たちが慌てて席に着いているのが見える。

「それじゃ俺が合図をしたら教室に入ってこい」

来栖川はそう言うのと扉を開けて教室に入っただけだった。教室の外にいる久遠に視線を向けていた生徒も来栖川が教壇に立つと、そちらに意識を集中させる。

「突然だが、転入生だ」

前置きもなく投げやりな来栖川の言葉を合図に久遠は二年A組に足を踏み入れる。久遠が隣に来たのを確認すると再び来栖川が口を開く。

「あー今日からこのクラスの一員になる上倉だ。上倉、自己紹介」

「上倉久遠です。よろしくお願いします」

結局、何も考えていなかった久遠の自己紹介はとてもシンプルなものだった。だが、A組の生徒は拍手を持って久遠を迎えてくれた。「はい、ちよつといーですか？」

拍手が鳴り止んだ頃を見計らって、ピンクのリボンで髪をポニーテールにした可愛らしい女子が、小学生並に真っ直ぐ手を上げる。身長も小学生並のようだ……

「俺の授業でもそんなぐらいの挙手をしてもらいたいもんだな……で、何だ？ 百瀬」

「是非、我々に転入生の上倉くんへの質問タイムを！」

百瀬と呼ばれた女子は来栖川の嫌味を物ともせずには発言する。他の生徒は静かに状況を見守っているが、どうも百瀬同様、好奇心に満ちた顔をしているところを見ると大多数の生徒が質問をしたがつているようだ。

義務教育を終えた高校生にもなると転入生など殆どいない。そもそも神雑学園は初等部からのエスカレーター式だ。外部入学でしか新しい人間が入ってこないのだから、転入生が気になるのも仕方が



ないのかもしれない。

それがわかっていても一クラス三十人分の質問をされると思うと憂鬱ゆううつな気持ちになる久遠だった。出来ることなら質問タイムは無しにしてもらいたいところだが

「少しだけだぞ」

久遠の願い届かず、来栖川は窓際に置いてあったパイプ椅子に座った。教壇に一人残された久遠は嘆息たんそくをする。

「それじゃ廊下側から順番に名前と質問してけ」

来栖川の提案により、久遠は全員の名前を知る機会を得た代わりに面倒くさい質問攻めにあうことが決まった。廊下側の一番前に座っていた男子が席を立つ。

「出席番号五番、梅本和樹うめもと かずき。そうだな……それじゃ趣味は？」

「読書」

「関川深雪せきかわ みゆきです。上倉君の好きな食べ物は何？」

「蕎麦」

「葉山美羽はやま みほね、出席番号は十九番です。えっと……上倉君はどんな本を読むのかな？」

「本なら何でも読む」

その後も当たり障りのない質問が続く中で、先ほど手を上げた百瀬に順番が回ってきた。

「ふっふっふ……この時が来るのを待ちわびていたよ」

何やら芝居掛かった振る舞いで席を立った百瀬に久遠は嫌な予感しかしなかった。周りからは「いけーA組のパパッチ娘！」やら「いつちやえいつちやえ！」などと囃はやし立てられているのを見れば誰でもそう思うだろう。

「出席番号二十三番、百瀬桃花ももせ とうか！ 人呼んで神薙学園のパパッチ桃ちゃん！」

しかも、A組から神薙学園へとグレードアップした看板を背負ってきた。周りからは何故か拍手喝采。百瀬も「どうもどうもー」と手を振っている。

「そんな桃ちゃんか上倉くんに訊ねることは、ズバリ！ 現在、彼女はいますかっ？」

百瀬の質問にA組の女子は目を輝かせて久遠を見ている。男子からは若干のやつかむ視線が送られているが……

「いない」

久遠が投げやりに答えると女子からは短い悲鳴が上がり、男子からは「同志よ！」という野太い声が上がった。

「そっかー、上倉くんって結構イケメンなのに意外だなー」

百瀬は呟きながら、桃ちゃんのマル秘手帳！ と書かれた手帳に何やら書き込んでいる。

そこからは百瀬同様に少し踏み込んだ質問も増え、久遠は暗鬱あんうつとした表情でそれらに答えていった。そして、ようやく最後の一人に順番が回る。

「真崎空音。二十一番。……あなた、能力者でしょ？」

窓際の最後尾から一つ前に座っていた空音の質問はいやに断定的だった。周りの生徒も思わずどよめく。

「……」

空音の質問の真意を測りかねる久遠は初めて黙った。何故そんな質問を思いつき、あまつさえそんなデリケートな問題に触れられるのか、と。

「雄弁な沈黙をありがとう」

その沈黙から空音は答えを導き出し、席に着いた。沈黙の理由はどうあれ、結局は久遠が能力者なのは変わらない。

「真崎。それはアウトだ……」

今まで静かに見守っていた来栖川が面倒くさそうに口を開いて空音を諭す。

能力者は普通の人間には忌避きひされる存在だ。それは、能力者の持つ能力が大抵は超常的なものだったり常識外のものだったりするからだ。人間は自分と違うものを認めないし受け入れない。そして、それは差別や迫害へと至ることもある。

そんな世の中でも神籙学園は能力者への理解があり、積極的に能力者の受け入れをしている。久遠もだからこの学園へとやってきたのだ。

「上倉君、能力者なんだ……」と誰かがポツリと漏らす。受け入れをしていると言っても、実際は一般生徒との隔<sup>へだ</sup>たりがいくらあるのも現状である。

「ほら、質問タイムは終了だ。後は休み時間にも各自でやれ。ああ、それから一時間目の俺の授業は生物室でやるから移動な」

来栖川はパイプ椅子から立つとざわざわと騒ぐ生徒たちに言い放つ。

「それと真崎は俺のところに来い」

呼ばれた空音は移動教室の準備一式を手にして、周りが教科書やノートを慌てて準備している横を通り、来栖川の前に立つ。

「なんですか？」

他の生徒達も準備しながら、廊下の外から様子を伺っている。久遠も空音に多少の興味を持ち、改めてその容姿を見る。

窓から入る太陽光に腰まで伸びる綺麗な栗色がキラキラと輝いているように見える。染めているならば髪質が落ちて天然の潤いが無くなる。輝くように見えるということは栗色の髪は地毛ということだ。女子にしてはそれなりの長身と端正<sup>たんせい</sup>な顔立ちが相俟<sup>あいま</sup>って美人という言葉がよく似合いそうだ。

「真崎、次の俺の授業は出席扱いにしてやるから上倉に学園を案内してやれ」

「何で私がそんなことしなきゃいけないんですか」

「さっきの質問で上倉を案内してくれそうな奴が減ったからだ。能力者の話題<sup>わたり</sup>っていうのは、扱いが難しいんだから気を使えよ。お前も能力者<sup>おんなじ</sup>なんだからわかるだろ……」

面倒くさそうに喋りながら頭を掻<sup>か</sup>いている来栖川の発言を聞き、期せずして空音も同じ能力者だと知った久遠は、あんたも話題の扱いには気を付けろよ、と内心そう思うのだった。

「あ、なら先生！ 私も能力者おんなじ！ 私も上倉くんを案内しますよー」  
そこで、今まで来栖川と空音の会話に聞き耳を立てていた百瀬が目をキラキラさせて話に割り込んできた。

「お前はダメだ。真崎は成績優秀だからまだいいが、百瀬……一年の時の自分の評定を覚えているか？」

「うぐ……でも、新しく神薙にやってきた上倉君に空音ちゃんは荷が重すぎると桃ちゃんは思っているですよ！」

「ダメだ。お前は俺の有難い授業を受けるんだ。ほら、行くぞ」  
「そんな殺生な〜」

来栖川は百瀬を連れて教室を出て行った。他の生徒も慌てて二人の後を追って出て行ったので、教室には久遠と空音だけが残された。

教室に取り付けられたスピーカーからは授業開始を告げるチャイムが流れる。そのチャイムが鳴り終わるのを聞き終えてから久遠は空音に話しかける。

「……えっと、真崎さんだっけ……」

「はあ……ええ、そうよ。上倉君」

「これからどうする？」

久遠は明らかに不機嫌そうにため息を吐いた空音に訊ねる。確かにこれは俺に荷が重そうだ……、と考えながら。空音は手に持っていた教科書やノートを置きに自分の席に戻っていく。

「そりゃ……来栖川先生の有難い言いつけを守るためにも、あなたに学園を案内するわよ」

「どうも」

そう言っただけ空音は机に手荷物を置いて教室から出て行ったので、久遠も慌てて後を追いかけて廊下に出る。

「鞆くらい置いてきなさいよ。邪魔でしょ」

それを見ていた空音は久遠が持つ鞆を指差して指摘する。

「いや、俺の席知らないし……」

指摘された久遠は困ったように言う。空音は指先を鞆から自分の席の後ろに佇む机へと変える。

「あそこがあなたの席でしょ。昨日までは無かったから」

久遠は教室に戻って鞆を机の上に置いてくる。

「教えてくれてありがとな」

「別に。あれだけ收拾がつかなくなってたんだもの。来栖川先生が忘れるのも仕方ないしね」

「いや、原因はお前が「お前って言われるのは嫌いな。やめてくれる」……真崎さんの質問が原因じゃ……どうしてあんな質問を？」

久遠が通ってきた方向とは逆に歩き始めた空音に、久遠は先ほどの質問の真意を訊ねる。空音は前を向いたまま答える。

「人間、第一印象ってのは大事よ。でも、私たち能力者ってのは、そのことが知られただけで周りの態度が変わる。なら初めに能力者って知つてもらった方が人間関係なんかは構築しやすいと思わない？ そう私は思うけど、あなたの考えが違ったら謝るわ」

空音はそこで足を止めて振り返り、久遠と向き合う。

「いや、確かに……どうせ能力運用部に入らなきゃいけなかったんだ。それなら最初にバレてた方が傷は浅いかもな。でも、どうして俺が能力者だと？」

久遠は納得したように頷きながらも、新たな疑問が湧き上がった。「先週の金曜日に来栖川先生が能運部に新しい部員が増えるって言うたから……学園の能力者は既に全員が所属しているしね」

「ああ、そういうことね。と言うことは真崎さんも能力者でいいんだよね？」

「ええ、ついでに百瀬さんも能力者よ」

「やっぱり……それにしても随分とみんなから慕われているんだな」

久遠は先ほどの百瀬とクラスメイトたちのやり取りを思い出す。能力者は普通の人間には忌避される。そして、それは能力者の人格形成にも大きな影響を与える。大体は人間不信に陥ったり捻くれた性格になったりする。空音は身を翻して再び歩き始めながら言葉を紡ぐ。

「それは百瀬さんの容姿と人柄や人徳のお蔭じゃないかしら。確かに彼女の能力は使い勝手がいいから」

「確かに人柄や容姿は愛されてそうだな。でも、使い勝手のいい能力と百瀬さんの人気にはどんな関係が？」

百瀬の言動や容姿を思い浮かべた久遠は気になったことについて訊ねる。

「私や百瀬さんが所属する能運部っていうのは、能力者が持つ能力を一般生徒のより良い学生生活の為に運用する部なの。そこで、彼

女は一般生徒から大きな支持を得ているわけ」

私はあの能力がもたらすモノは厭われと紙一重だと思っけど、と空音は久遠には聞こえないぐらいの小声で皮肉そうに付け加えた。

「なるほど。能力者を孤立させないために、か……百瀬さんは一体どんな能力者なんだ？」

「自分で訊ねなさいよ、そういうことは」

空音はそう言い放ち、すたすたと歩いていく。確かに百瀬の言うように取っ掛かり難しい部分はあるが、それなりに面倒見は良さそうだし、訊ねたことにはちゃんと答えてもくれる。そう感じた久遠は空音への評価を改めた。

「そういえば、どこに向かっているんだ？」

「どこにしようかしらね……とりあえず無駄な視線に晒されるのは嫌だから一般教室の前の廊下を歩かないようにしているけど」

久遠が辺りを見回すと確かに一般教室は無く、横の教室のプレートには資料室と書かれている。

「それには俺も賛成だ。もう授業が始まってるしな」

「そうね……あなたはお弁当派？ 学食派？ それとも購買派かしら？」

「ん、ああ……前は学食が無かったから基本はコンビニで買い弁だったけど、食堂や購買があるなら教えてくれると有難い」

「わかったわ。食堂と購買は一階にあるからそこへ行きましょう。

あまり時間も無いから他に知っておきたい場所をリストアップして  
いて」

「わかった」

二人は階段を下って一階を目指していった。

その頃、生物室では……

「先生ー、どうして授業を欠席させてまで空音ちゃんに上倉くんを

案内させたんですか？」

出席を取り終えた来栖川に百瀬が質問をする。他の生徒も疑問に思っていたようで、来栖川に二十八対の視線が集まる。

「ああん、そりゃ能力者同士の方が気兼ねなく……」「初対面の上倉くんかみと空音ちゃんか？」……「まあ、何とかなるだろ。どうせ上倉も能運部所属だ。早いか遅いかの違いだろ」

百瀬の疑問に適当に答える来栖川に生徒は苦笑する。先ほどはざわめいたが、二年A組の生徒たちは学園では能力者に理解のある方だ。それは、百瀬の人気もあるが、空音の能力や他の能力運用部の部員に助けられた生徒も少なからずいるからだ。

「でも、それなら同じ能運部に所属の私でも……」「確か百瀬の一年の時の評定平均は……」それだけはやめてー」

いやー、と叫ぶ百瀬を見て、生物室は笑いが起こった。

「ほら、雑談はこれぐらいにして今期の授業の説明をするぞ」

「それって教室でも良かったんじゃない……？」

「いちいち口を挟むな、百瀬。お前の単位をアヒルから煙突にするぞ」

「ふえ！ 二年になってから始まった生物で既にアヒルさん扱い！ しかも、それがあの噂の煙突に！ 先生、それはいくらなんでも職権乱用です！」

「あ、いくらバカ桃でも煙突は無かったんだ……」

その言葉に百瀬の隣に座っていた関川がボソツと呟く。

「あー、ひどっ！ みゆみゆまでそんなことを！」

「だ、誰がみゆみゆだ！ このバカ桃！」

二人はきゃーきゃー、と騒ぎ立てる。それを見ていた来栖川の蟀こめ谷かみに青筋が浮かび始めた。

「あ、二人とも、先生が……」

同じ机に座っていた一人の女子が黒板の前に立つ来栖川を指差す。

二人がギギギツと顔を来栖川に向けるとそこには普段は絶対に見せないだろっ満面の笑みを浮かべていた担任の顔。だが、目は笑って



いない。

「そ、それじゃ、ちゃっちやと授業に入りましょうよ。先生！」

「そ、そうですよ。私たちも来年は受験生だし、今からしっかり勉強しておかなきゃ……」

「そうだな、関川の言う通りだ。そんな勉強熱心な二人には放課後、特別に課題をやるからちゃんと顔出せよ」  
プレゼント

「そ、そんな〜」

二人の叫びが生物室に木霊した  
こだま

二人は数百人が一度に食事を取れそうな食堂へとやってきた。

「ここが食堂で券売機はあれ。他にも購買や自販機があそこにあるわ」

空音が順に指差す先には四台の券売機と購買、数台の自動販売機が並んでいた。久遠はひとまず券売機へと足を運ぶ。

「上倉君？」

「学食の値段を確認しようと思って。多くはない生活費でやりくりしないといけない身なんでね。……お手頃な値段だな。」

「それは学食だもの。それから味とボリュームにも定評あるわよ」  
券売機の前でメニューを品定めしている久遠の隣に空音もやってきた。

「そりゃ嬉しい知らせだ」

そう言っつて財布を出して券売機にお金を投入する久遠に空音は訝しげな視線を送る。

「食堂はまだ営業してないわよ？」

「いや、食堂はよく混むつて聞いたから先につて思つてね」

「ああ、なるほど。初心者のかせに高等技術を使うのね」

苦笑しながら答える久遠を面白そうに見やる空音。最初に感じた不機嫌そうなおーラは、もうどこにも感じられない。

「初日から食くいつ逸はくれるのはごめんだからな。真崎さんのオススメつて何かある？」

「そうね……月曜日の日替わり定食はいつもより少しだけ豪華ね」

「んじゃ、それで」

久遠は日替わり定食のスイッチを押して食券とお釣りを取り出す。

「はい」

「ん、これは？」

久遠は取り出した食券を空音に差し出す。それを不思議そうに眺

める空音。

「学園を案内してもらっているお礼、かな」

「ああ、そういうこと。でも、今日は珍しく早めに目が覚めたからお弁当なの。気持ちだけ受け取っておくわ」

そう言っつて空音は今まで表情に乏しかった顔に微笑を浮かべた。

久遠はその微笑に一瞬、見蕩れる。

「なんだ、少しとっつき難いって思ってたけど、真崎さんも笑えるのな」

にかつと笑っつてそう指摘する久遠に、空音は少し顔を赤らめて反論する。

「そ、そりゃ私だつて人間よ。笑ったりもするわ」

「それもそうだ」

「そう言っつ上倉君。あなただつてホームルームの時は随分と無表情だつたわよ」

簡単に納得する久遠に今度は空音が指摘し返した。久遠は苦笑いしながら答える。

「初めての環境で緊張してたんだよ」

「どーだか……」

空音はため息を吐く。久遠はそれを尻目に自動販売機へと歩いてく。

「真崎さんは珈琲派？ 紅茶派？ それともお茶派？ 意外に炭酸派だつたりする？」

「強いて言っつなら珈琲派ね。紅茶も好きだけど……何かしら、食券の代わりに飲み物でも奢つてくれるの？」

面白そうな顔をして、空音は自動販売機の前に立つ久遠の横に並ぶ。

「ただ聞いただけ。ちなみに俺も珈琲派。気が合っつね」

「あ、あなたね」

「ははっ、冗談。どれでも好きなの選んでよ」

久遠は自動販売機に五百円玉を入れて空音に正面を譲る。

「全く……」

空音は自動販売機の前に立ち、少しの間考え込むと、釣り銭のレバーを押す。

「へ？」

「私、このメーカーの缶コーヒーは好きじゃないの」

そう言って空音は五百円玉を取り出すと、隣の自動販売機にその五百円玉を投入し、虹色に輝いてパイプを啜えるオッサンが描かれた缶コーヒーを選ぶ。

「さいですか」

「上倉君は買わないの？」

取り出し口から缶を取り出した空音は、振り向き様に訊ねてきたので久遠は悩みながら手を伸ばす。

「そうだな……んじゃ俺はこれにするか」

久遠は最上段にあった無糖の缶コーヒーのボタンを押す。

「ちよつと……ち、近いわよ」

「あ、悪い」

空音が避ける前に手を伸ばしたので二人の距離は大分近かった。空音は若干頬を染めながら文句を言った。微妙な雰囲気が出る空間に割って入る声が食堂に響いた。

「お前ら！ 授業はどうした？」

二人が食堂の入り口に目をやると、そこには年配の教師がこちらを睨み付けながら歩いてくるのが見えた。

「……面倒くさいのに見つかったわね」

空音はボソツと小さな声で呟く。

「お前は二年A組の真崎だったな。そっちのお前は見かけん顔だな。何年何組だ？」

教師は二人を見定めるように眺める。空音は教師と目を合わせないようにして黙り込んでいる。久遠は黙り込んでいても仕方ないと思ひ、教師の質問に答えることにする。

「本日付けで二年A組に転入してきた上倉久遠です。あの、あなた

は？」

「俺は数学教師の葛城だ。生徒指導もしているがな。……そうか、お前が新たにこの学園にやってきた能力者つてのは」

葛城は久遠たちのことを明らかに蔑みあはれの目で見る。その目を見た久遠の表情は一気に冷めていく。どうやらこの葛城という教師は能力者に対して強い偏見を持っているようだ。

「転入初日から授業をサボるとは、これだから能力者は……どんな思考回路をしているんだ？」

葛城は嫌味たらしくグチグチと言葉を羅列られつし始めた。それに対して今まで黙っていた空音が口を開く。

「お言葉ですが、私たちは担任で一時間目の生物担当の来栖川先生から許可を貰って、上倉君に学園を案内していただけです。別に授業をサボっていたわけじゃありません」

屹然きつぜんとした空音の物言いに一瞬怯んだ葛城だが、すぐさま反撃してくる。

「なら、どうして自販機の前であんなに密着してたんだ？ それに手に持つてるものは何だ？ 来栖川先生は他の生徒が授業をしている間に仲良くお茶でもしている、とでも言ったのか？」

「そ、それは……」

葛城の指摘に空音は言葉に詰まる。密着していたのは誤解だが、それを証明することは出来ないし、手に持っている缶コーヒーについては確かに葛城が言っていることの方が正しい。空音が何か良い言い訳を、と考えていると今度は久遠が口を開く。

「密着していたのは真崎さんが退く前に自販機のボタンを押したからで他意はありません。それと缶コーヒーを授業中に買っていたのは、スミマセンでした。真崎さんが来栖川先生の指示とはいえ、貴重な勉強の時間を俺の為に割いてくれたのでそのお礼に、と俺が買ったものです。真崎さんには何の責任もありません。俺の配慮が足りませんでした。転入初日から葛城先生のお手を煩わづらわせてすみませんでした！」

久遠が理路整然しりせつせいぜんと事情を話した後に深々と頭を下げると、葛城も戸惑っているようだ。

「だ、だがな……」

それでも言葉を紡ぐこととする葛城に空音が再び口を開く。

「私も反省してますので今回は……これ以上突っかかってくるならアホ部長と百瀬さんをけしかけますよ。」

最後に空音がボソツと呟いた言葉に葛城の顔が青くなる。

「お、お前は……きよ、教師を脅そうというのか？」

「私、お前って言われるのは嫌いなんですよね……それに、葛城先生だって私の能力を知らないわけじゃありませんよね？」

「チツ……今回はこれ以上言わんが、次は無いと思え、化け物共」

葛城はそう言い捨てて食堂を後にしていった。二人はその後ろ姿をただ眺める。

「神薙は能力者に理解あるって聞いてたんだが、ああいった教師もいるんだな……」

「そうね……いけ好かない先生だけど、ああいった先生も必要なんじゃない？ 最後の言葉はムカつくけど。……何が化け物共よ！

……でも、私たちは学生なんだから、いつかはこの神薙を卒業するわ。そして、大学に進学するなり社会に出るなりすれば、葛城のような手合いは沢山いるわ。そんな時に困らないようするためには丁度いい予行練習よ」

まあ、犬に噛まれたと思えましょう、と言いつつ空音に苦笑する久遠。空音は振り向いて自動販売機に近寄ると取り出し口から缶コーヒーを取り出した。

「はい、上倉君の缶コーヒー」

「あ、ありがと」

久遠は空音が差し出す缶コーヒーを受け取る

「はあ、それにしても転入初日から葛城に目を付けられるとは、上倉君もツイてないわね。どうせ能力者ってだけで目を付けられるから、早いか遅いかの違いだけだ」

空音は自分の缶コーヒーのプルタブを開けて一気飲みをした。

「う、豪快だな……」

「ふう、本当に一度ぐらいはあの二人をけしかけようかしら？」

『部長はどうか知らにゃいけど、桃ちゃんとしては先生と問題を起こす気にはにゃらにゃいかにゃー』

独り言のように呟く空音の上　自動販売機の上から声が聞こえてきた。

「へ？」

「百瀬……さん？」

二人が自動販売機の上に視線を向けると、そこには顔を掻いている黒猫がいた。

『はい。みんなの桃ちゃんです。それにしても、ちよこっつと心配して二人の様子を見てみれば……いやー随分と仲良しさんになつてるね！　桃ちゃんびつくりだにゃ』

「百瀬さん、あなた……いつから尾行してたの？」

答えようによつては……と続く空音から何か黒いオーラが出ている。空音としては、いつもの自分と違ったことは重々承知している。それをネタに百瀬が今まで以上に懐いてくるのを遠慮したいところなのだが……

そんな空音の心情はいざ知らず、黒いオーラを発する目の前の少女から久遠は一步後ずさり、黒猫は暢気に欠伸をしている。

『んー、二人が廊下に出た頃からだにゃ』

「ほぼ全部！」

『にゃー、空音ちゃんの珍しい姿が見れて楽しかったにゃー』

「っ！　三味線にしてやる！」

ケラケラと笑う世にも珍しい黒猫に本気で飛びかかろうとする空音を、後ろから羽交い絞めにする久遠。それを見てさらに笑う黒猫に、空音がさらに暴れた。

「ちよ、落ち着け！　あれ、本当に百瀬なのか？」

『違つにゃ、この仔とちよこつとばかり精神を共有してるだけだに』

や。だから、この仔を三味線にするのはちょっと勘弁にや」

「……………それが百瀬の能力なのか？」

困ったそうな顔をする黒猫くろねこに久遠は訊ねる。

『そうにや。これが桃ちゃんアニマルリンクの能力……………動物縁アニマルリンクにや』

「動物縁……………動物と精神を共有させる感じの能力か……………？」

『まあ、大体それで間違いにやい……………にや！先生？今ちよつと取り込み中にやのに、ふにや！』

「百瀬？」

突然取り乱したかと思うと、黒猫はひょいっと自動販売機から飛び降りて食堂から出て行った。

「……………えつと？」

「ちよ、もういいから離して！」

久遠は空音の羽交い絞めを慌てて解く。

「あ、悪い」

「百瀬さんのリンクが解けたんでしょ。大方、来栖川先生に授業中能力を使つてるところがバレたんでしょ。……………いい気味だわ」

最後にポソツと呟いた空音の声が聞こえた久遠は、少し戸惑った後に思い切つて訊ねる。

「もしかして、百瀬のことが嫌いなのか……………？」

「嫌い……………どうかしら、苦手なのは確かね。能力者でありながら明るい性格にあの人氣……………どうあつても私と真逆な百瀬さんが羨ましあつましいいのかもね。そして、それは」

妬みと紙一重……………

空音が区切つた言葉の先に、そう続く気がした久遠は少し考えて口を開く。

「でも……………羨ましいって思うのはさ、自分もそうなりたいと思うことだろ？まずは仲良くしてみたら？向こうは大分、真崎さんに歩み寄ろうとしてるみたいだしな」

明るめに話す久遠の言葉を聞いた空音は俯うつむくと、かろつじて聞き取ることが出来るぐらいの声で喋り始める。



「そうかもね……でも、彼女の近くは暖かくて眩しすぎるの。私は嘘を吐いて逃げた人間だから……」

「え？」

久遠が空音に言葉の意味を訊ねようとすると、授業終了を告げるチャイムが食堂に鳴り響いた。その音が止むと空音は顔を上げて歩き始める。一瞬見えたその顔は、今までのような表情に乏しい顔だった。

「チャイムも鳴ったし教室に戻りましょう。運の悪いことに次の時間は葛城先生の数学なの。だから、もし遅れようものなら……また嫌味を言われるわ」

「あ、ああ」

突然の変化、いや……最初の頃に戻った空音に戸惑う久遠。空音はそんな久遠の戸惑いなど気にもせず、近くにあったゴミ箱に空き缶を捨てる。

「もし、まだ見たい場所があったなら昼休みか放課後にでも案内してあげるわ」

そして、空音はすたすたと食堂の出口へと歩いていく。久遠もただその後ろを付いていくしかなかった。

教室に戻ると、何故かクラスメイトに受け入れられていた久遠は、各教科の間にある休み時間の度に机の周りを包囲された。主に百瀬が率先していたが……

昼休みには男子数人に食堂へと連行されたり、事前に買っていた食券について問い詰められたりと、ごく普通の転入初日を過ごした。あつと言う間に放課後になった久遠は、帰宅したり部活に行ったりするクラスメイトを見送る。教室の中には現在三つの人影。

「あなたも随分と人気者のようで……」

「転入生だからだろ。動物園のパンダはきつとこんな気分だ」

前の席で横向きに座りながら廊下側の窓を眺める空音の言葉に、久遠は机に突っ伏しながら皮肉で返す。

そこに、ピンクのリボンで結んだ髪を尻尾のように揺らしながら、もう一つの影が近づいてきた。久遠も机から起き上がり、空音と同様に横向きに座る。

「何て言うか……改めまして、百瀬桃花だよ。趣味は情報収集。空音ちゃんと同じで能力運用部に所属してて、新聞部にも所属してるよ。能力は動物縁！<sup>アニマルリンク</sup> よろしくね」

満面の笑顔で自己紹介をする百瀬は手を差し出してきた。久遠も一瞬躊躇したが、すぐにその手を握った。

「俺も改めて、上倉久遠。二人と同じで能力運用部に入る予定だ。

よろしくな、百瀬」

「んもー、同じ能運部の仲間なんだし……百瀬って名字じゃなくて名前と呼んでよー、なんなら桃ちゃんでもいいよ！ 久遠くん」

やたらニコニコして久遠を圧倒させる百瀬。そんなやり取りを冷めた目で見つめる空音。久遠は目を瞑<sup>つぶ</sup>って嘆息をする。

「わかったよ……これからよろしくな、桃花」

「よろしくね それじゃあ、これから部室に行こうよ。他の部員

と顔合わせしようよ！」

「わ、ちよっ!？」

繋いでいた手をいきなり引つ張られた久遠は慌てる。それに構うことなく百瀬はその小さな体のどこにあるのかわからない力でグイグイと教室の扉まで引つ張る。

「あ、鞆忘れてた」

ふと思い出したのか、百瀬はパツと手を放して自分の席に戻っていく。解放された久遠も自分の席へと鞆を取りに戻る。

「真崎さんは行かないの、部室？」

久遠は鞆を手に取りながら不機嫌そう空音に訊ねる。

「行くわよ。……それから私も同じ能運部の仲間なんだから、さん付けはいらないわ。久遠君」

空音はそう言うのと鞆を手にとって教室の出口へさっさと歩いていく。その後ろ姿に久遠は一瞬考え込んで声をかける。

「一緒に行かないのか？ 空音」

「ええ、図書館に本を返してから行くわ」

空音は久遠の言葉に振り返って答える。その時の表情は穏やかな微笑みだった。空音の理由を聞いた久遠は慌てて追いかけた。

「あ、図書館？ なら、本を返しに行くついでに俺も連れてってくれないか？」

「え？」

久遠の言葉が意外だったのか首を傾げる空音。

「俺の趣味、読書。質問タイムの時に言った」

「そっついえば……」

「それにさっき、見たい場所があったなら昼休みか放課後にも案内してくれるって言ってたよな」

「……そうね、じゃあ図書館に行きましょうか」

自分の言動を思い出した空音は納得して頷いて教室の扉に手をかける。

「あ、桃花はどうする？ 一緒に図書館行くか？」

そこで、久遠は思い出したかのように振り返って百瀬に声をかける。久遠の後ろでは今まで穏やかな微笑みを浮かべていた空音の表情が少しだが曇る。

「……桃ちゃんの本読むのが苦手だから遠慮するよ。先に部室行って待つてるね」

それを見た百瀬は苦笑しながら答える。空音は久遠の腕を強引に取る。

「行きましよう、久遠君」

「あ、ああ……また後でな」

「ばいばい」

再び引つ張られる久遠を面白い物でも見るかのような表情で見送る百瀬。もう教室には百瀬しかない。

「いくら動物縁アニマルリンクがあつて動物と仲良しでも、空気読まないおバカさんは馬に蹴られるんだよ？ 久遠くん」

誰に言うでもなく百瀬は呟く。

「それにしても……あの空音ちゃんがね、随分と久遠くんのことを気にしてるみたいだね。うちの学園の能力者は良くも悪くもみんな濃いからな、これは……来栖川先生の作戦勝ち？ いやいや、ただの偶然だよな。」

腕を組みながら頷いていたかと思うといきなり首を横に振り始める百瀬。もし、誰かが教室を除けば変人扱いされることだろう。だが、そのレットルもあの百瀬桃花ということで納得されるだろうが

……

「久遠くんも初めは随分と無愛想だったけど……今日一日ふたを開けてみれば大分クラスに馴染めたみたいだし、それも空音ちゃんとのやり取りが大きいよね。ハッ！ やっぱこれは先生の目論見通り？ うん」

最後の自分の考えに目を瞑って首を傾げる百瀬。何度も唸ってようやく目を開ける。

「部長たちはどう思いました？ 久遠くんのこと」

そして、誰もいないはずの教室に向かって問いかける。すると何も無い空間から二人の男子がスーツと現れた。背の高い方の男子は金髪にピアスをいくつか付けて派手な装いだ。もう一人の男子は真新しい制服を着ていて、額には何故かアイマスクがあり、下手くそな字でゴメンナサイと書いてある。

「……お似合いなんじゃね？ で、どうしてオレらがいるってわかつたんだ、百瀬」

「気付いたのは黒猫と動物縁してた時ですよ。猫なんかは音に敏感ですしね。それにしても……部長、ホントに一日中久遠くんのことを張ってたんですか？」

「……あ！ お前、鎌掛けたなっ!？」

金髪の男 能力運用部の部長が大げさに叫ぶ。

「そりゃ……黒猫と動物縁している時ならまだしも、素で清澄くんキヨウセイの遮断包陣を把握なんか出来ませんって」

ケラケラと笑う百瀬を見て、部長が考え込む。ちなみにこの三人は中等部からのエスカレーター式である。中等部でも能力運用部に所属していたので付き合いは長い。

「やっぱり、清澄の視覚だけじゃなくて聴覚も遮断しておくべきだったか……」

ブツブツと独り言のように喋る部長の言葉を聞いた清澄の顔が血の気を失って青くなっていく。

「そ、そんな無茶ですよ！ ただでさえ半日も視覚を遮断された状態で連れ回されて、精神疲労が半端ないのに、聴覚まで封じられたら……ゆ、誘拐されてる人質と変わらないじゃないですか！」

「じよ、冗談だ。だから落ち着け、な」

普段見せない後輩の剣幕に狼狽える部長。

「うう……」

「あゝ、清澄くん泣かせたー、優月先輩に言っちゃおうかな？」

「な、泣いてません！」

「ゆ、優月に言うのだけは勘弁してくれ！」

二人が叫ぶのを聞いて、百瀬はニヤリと笑う。それなりに長い付き合いから二人は、その顔が何かを企んでいる時の顔だと知っている。

「でも二人とも……今日一日中久遠くんや空音ちゃんに張り付いてたよね。それから、部長は清澄くんを丸々一日サボらせた上に遮断包陣オアラップを使わせたよね。そのことを久遠くんや空音ちゃん、優月先輩に黙ってて欲しかったら……」

「欲しかったら？」

ゴクリと息を飲む二人。

「購買でお菓子とジュースを買ってきて！ モチ部員分。部長千円分の清澄くん五百円分ね」

「へ、何？ パーティーでもすんの？」

「イエス！ 久遠くんの歓迎パーティーですよ！」

部長の疑問に何故か諸手を上げて万歳をする百瀬。清澄はその姿を見て微笑む。

「桃ちゃん先輩も好きですね、そういうの」

「まーねー、で、これが桃ちゃんの分」

お財布から硬貨を一枚取り出してピンツと弾く百瀬。硬貨は綺麗な弧を描いて部長の手に吸い込まれた。

「五百円玉？ お前も金出してくれるのか、百瀬？」

「いえーす。桃ちゃんも空音ちゃん怒らせてるんで……」

ナハハ、と笑う百瀬に苦笑する部長。

「確かにな……それじゃ清澄、行こうぜ」

「あ、はい」

教室を出て行くこうとする二人に百瀬は後ろから声をかける。

「あ、ちなみにこれは私が主催になります」

「へ、オレらの手柄は無し？」

「だって、久遠くんや空音ちゃんからしたら二人の犯罪行為ストーカーを知らないわけだし、二人の名前出したら逆に怪しまれますよ？」

「た、確かに……」

特に空音は部長の性格や清澄の遮断包陣カットオフアッパを知っているので尚更である。

「ということで、よろしく〜」

「はいはい……」

楽しそうに手をひらひらと振る百瀬に、適当な返事を返して歩き始める部長。

「あ、部長」

「あん？ まだ何かあるのか？」

教室を出ようとしたところで百瀬に呼び止められた部長が振り返る。そこにはいつになく真剣な表情をした百瀬がいた。

「私も面白いことは大好きな人間だから強く言えませんが、流石に授業サボるのは拙ますいですって。ただでさえ私たちは危あやういんだから……」

「……葛城か？」

食堂での久遠たちと葛城のやり取りを思い出した部長の言葉に百瀬は首を振る。

「それもそうですけど、生徒会にも気を付けた方がいいですよ。神楽先輩はもういないんですから……」

「……そうだな。それに今の生徒会長は……ハア、どこで狂ったのか。いや、最初からか……」

百瀬の言葉に部長は声を落とす。今はもういない一人の女性を思い出す。いつも笑顔で真っ直ぐな女性だったな、と……そして、自分と同じクラスの生徒会長を思い浮かべた部長は溜息を吐く。

「……だから、少し自重して下さいよ」

「あいよ」

部長はそれだけ言い残して教室を後にする。清澄も百瀬に一礼してその後に付いていった。百瀬も鞆を手に取り、廊下に出る。

そして、沈んだ空気を振り払うように仲間の集まる部室へと向かった。





「こんにちは」

百瀬は扉を元気よく開けて部室に入る。室内には眼鏡をかけた男子が本を読んでいた。その男子は百瀬を一瞥すると、読んでいた本に葉を挟んで視線を上げる。

「百瀬か、相変わらず元気だな」

「それが私のチャームポイントなんで！」

男子の言葉に百瀬は応えながらいつもの定位置に座る。

「言ってる」

「つれないですねー、星崎先輩ほしざきは。それにしても……今日は随分と集まりが悪いですね」

男子……星崎の呆れた声を気にした風もなく、百瀬は会話を続ける。

「そうだな。優月と茅原ちほひはCCPからの呼び出しで公欠なのは知ってるが、後は知らん」

「あゝ、だから部長が、あつ？」

星崎の言葉に、部長が授業をサボれた理由を察した百瀬は納得の声を上げた。そして、すぐさま口を噤つぶむ。

「は？ アイツなら学校に来てなかったぞ」

「や、こつちの話です」

そのことに対して星崎は怪訝けげんそう顔をする。百瀬は手を出して深く聞かないで、と意思表示をする。その姿に星崎は疑問を感じながらも、再び呆れ声を出す。

「？ 相変わらず変な奴だな」

「相変わらずは余計です」

「変な奴は良いのか？」

「それはキャラ作りです」

「言ってる」

星崎は嘆息をし、閉じていた本を読み始めた。

しばらくすると、部長が扉をバツと開け、手に持ったビニール袋を高々と掲げながら部室に入ってくる。

「皆の者！ 宴の準備じゃ！」

後ろに清澄を引き連れ、異様なまでにテンションが高く、何故か時代劇風な喋り方だった。

「お前はいつの時代の人間だ」

「何じゃ、二人しかおらんのか？」

本から顔を上げてツツコンできた星崎を気にするでもなく、部長は室内を見回す。

「優月と茅原はCCPだ。後は知らん……というか、今日の授業はどうした？」

星崎はいつものことと諦め、先ほど百瀬に言った説明をする。それから少し語調を強めて部長に質問する。

流石に今回はスルーをできないと思った部長が若干、狼狽える演技をする。

「あいや、某は止むを得ない事情があつてな……」

「アレがですか？」

「契約違反だぞ、百瀬」

百瀬の言葉に、急に素に戻った部長は、百瀬の前に手に持っていたビニール袋を置いた。

「口調戻ってますよー、部長」

「清澄はあの二人から何か聞いてないか？」

ビニール袋の中身を漁りながらツツコむ百瀬を無視して、部長は振り返って清澄のビニール袋を受け取りながら訊ねる

「あ、二人とも明日の準備があるみたいで今日は部活を休むって言ってました」

「と言うことは、ここの四人と……後は空音ちゃんと久遠くんの計六人か」

言伝を思い出した清澄の言葉に、百瀬が今いる三人を眺めながら

呟く。百瀬として全員で久遠の歓迎会をしたかったようだ。星崎は百瀬の呟きを聞いて、先週の金曜日に来栖川に伝えられたことを思い出す。

「そういえば、今日だったな。その転入生ってのはどんな奴なんだ？」

「うーん……少し冷めてる部分もありますけど、そんなに能力者らしい性格はしてなかったですねー」

星崎の問いに百瀬は腕を組んで考える。今日一日、百瀬から見た感じの久遠の性格は、そこら辺の男子高校生とそれほど変わらないように感じた。能力者になると大体が歪んだ性格になるが、久遠にその様子は見られなかった。

「そいつは、いつ能力者にされたんだろうな……」

能力に目覚めたばかりの人間の大体は性格が歪む。それは、能力者になったことで優越感に浸かり暴れるか、能力者になったことで心を閉ざすかのどちらかが多いからだ。破壊的か自閉的と方向は違うが、結局は歪んだ性格になる。

空音もまだ能力者になってから、一年しか経ってない為か、やや自閉的な性格になっている。

「そうだな。ここにいる部員は真崎を除いて、初等部か中等部には神薙に来てっから、絆も強い。そして、多感な時期を同じ仲間と過ごしているからこそ、性格もちよつとぶつ飛んでるだけで済んでるけどな……」

百瀬を見ながら喋る部長と、部長を見続ける百瀬。その二人を交互に眺める星崎と清澄。しかし、能力者になるということには、それなりの過去があったのだ。だからこそ、性格が歪むことが多い能力者だが、そうなることもない久遠について色々考える二人だった。

「それはいずれ本人に訊ねればいいとして、今は久遠くんの歓迎会の準備をしましょう！ さあ、部長。派手にいきましょー！」

「オウ！」

真剣に考えている二人に百瀬は声を張り上げて歓迎会の準備を提案する。部長も他人の過去をあれこれ詮索するよりそっちが楽しいと思いい、親指を立てて応えて準備を始める。

その二人を見た星崎と清澄はお互いを見合って苦笑し、準備を手伝うことにした。

それから数十分が経った頃、扉をノックする音が聞こえた。

「ここって蔵書量が多いんだな」

「ええ」

図書館が閉館するまで居座った久遠と空音は、能力運用部の部室まで雑談を交わしながら廊下を歩く。

「でも、四時過ぎには閉館か……」

「それは私も不満だわ。……ここを曲がった先に部室があるの」

廊下の角を曲がったすぐ右手側に、能力運用部と書かれたプレートがぶら下がる扉を見つけた久遠。だが、それよりも気になるものが目に入った。

「なあ、あそこって何？」

「ん？ ああ、あそこは鳩小屋よ。百瀬さんが管理してるの」

久遠の視線の先には、廊下の行き止まりを改築して造られた鳩小屋があつた。

「それって……いいの？」

「ちゃんと学園側の許可は取ってあるし、いいんじゃないかしら」

「へ、へえ……」

久遠はただ茫然とするしかなかった。そんな久遠を気にするでもなく、空音は部室の扉をノックして中に入る。久遠も慌てて後に続いた。

「失礼します」

「……失礼します」

中に入ると部屋の中央には大きな机がかなりの面積を占め、その上には何故かお菓子とジュース。壁際のホワイトボードには『ようこそ！ 能運部へ！』とでかでか書かれていた。

「あ、お帰りなさいませー、久遠くんに空音ちゃん！ ささ、こちらへ」

「お帰りなさいませー」

そして、何故かメイド服を着た百瀬と金髪の男子。

「……」

「いつものことだから相手にしなくていいわ」  
固まる久遠に空音は一言言っただけで席に座った。

「そ、そうか……？」

「君が転入生の？」

どうしていいかわからず、立ち尽くしている久遠に眼鏡をかけた男子が声をかけてきた。

「あ、はい。上倉久遠です。よろしくお願ひします」

「ああ、よろしく。俺は三年生の星崎賢太郎だ」

「で、オレが能運部部長の春日洸太。こいつが一年の清澄」

久遠と星崎が自己紹介をしていると、メイド服を着た男……春日が自分と肩を組んだ後輩の自己紹介をする。清澄は若干緊張した面持ちだ。

「き、清澄透哉きよすみ としやです。よろしくお願ひします。」

「よろしくな」

「あと他に部員が四人いるんだが……」

「今日は二人がCCPで公欠、もう二人がサボりだ」

春日の言葉を星崎が続けた。その言葉に久遠が首を傾げる。

「CCPってというのは？」

「能力犯罪対策課、通称CCP。近年増えてきた能力者の犯罪を解決する為に出来た警視庁長官直属の課だ。まあ……ここにいる部員全員がCCPに所属してるけどな。今回は偶々あの二人にお鉢はちが回ってきただけだろ。……けど、来栖川先生からCCPについての説

「明はなかったのか？」

春日の説明に久遠は何やら苦々しげな表情を浮かべる。

「えっと……はい。『能力者の為の部活だ。行けばわかる。』とだけしか……」

「あの給料泥棒め……」

「でも、そのお蔭で私たちが好き勝手できる部分も多いじゃないですか」

毒づく春日の言葉に百瀬が能天気な声を上げる。

「確かにな」

「廊下の鳩小屋みたいに？」

「そうだねー、他にも色々と奥にあるよ」

入ってきた扉と机を挟んで対角線上の位置にある扉を指差しながら答える百瀬に、久遠は質問を続ける。

「色々つて？」

「まず、キッチン！ 冷蔵庫にIHのコンロ、電子レンジ、ポットでしょ……液晶テレビにソファー、パソコン、さらには洗濯乾燥機にシャワールーム！」

ゲーム機も一通りあるよー、と最後に百瀬が付け加えた言葉を聞いた久遠は顔を顰めた。

「……誰かここに住んでんの？」

「そんなわけないじゃん。可笑しなこと言うね、久遠くんは」

ケラケラ笑う百瀬から視線を外し、空音の方を向く久遠。空音は静かに首を横に振った。それだけで久遠は全てを悟った。

とりあえず受け入れようと……

その後、恙無く開かれた久遠の歓迎会も終わりに近づいてきた。机の上に広げられたお菓子の袋や箱も殆どが空っぽだ。

時計を見ると時刻は五時半前。

「もうこんな時間か……」

「そろそろ片付けて下校するか？」

「そうだな……」

三年の二人が話し合っているとコンコンコンと扉をノックする音が聞こえた。

「あれ、優月はCCPじゃなかったっけ？」

「ええ……でも、なんで優月先輩だと？」

ノックの音を聞いた春日は首を傾げながら疑問を呟く。それを聞いた清澄は春日が何故ノックの主を優月と決めつけたのかが気になった。

「くそ丁寧なノックの仕方。入れよ、優月」

「失礼します」

静かに扉を開けて部室に入ってきたのは、肌が透き通るほど真っ白で髪の毛も純白の女子。整った顔には二対の紅色の瞳。その姿は美しさを超えて神話に出てくる女神のようだった。

「おう、お疲れ。今日はCCPだろ。どうして部室に？」

「あ、うん。さつき桃ちゃんがツイッターで『新しい部員！久遠くんの歓迎会なう！』って呟いてたの。だから、わたしも顔を出そうかなって思ったの」

春日の言葉に女子……優月は朗らかに笑いながら手に持ったスマートフォンを見せて答える。女神は随分と現代っ子のようだ。

「でも……もう終わったところだったみたいだね？ ざんねん」

机の上の状態を見た優月は、少ししょんぼりしている。それから視線を久遠にスツと移して微笑む。

「それで……君が転入生の久遠くんかな？」

「あ、はい……上倉久遠です」

「わたしは優月ゆづきなすな齋。よろしくね」

「……よろしくお願ひします」

久遠の視線が全身に注がれるのを感じた優月が苦笑する。

「ふふ、やっぱり気になるよね」

「あ、すみません……不躰な視線を送って……」

「ううん、もう慣れたから気にしなくていいよ」

すぐさま久遠が謝ると、優月は久遠が気に病まないようにと穏やかな微笑みを浮かべた。傍らでは春日が心配そうな表情をしている。

「なすな……」

「こーたは心配し過ぎ。……ねえ、久遠くん……アルビノって知ってる？」

「多少は……劣性遺伝子などにより、先天的にメラニンが欠乏する遺伝子疾患ですよね」

「うん。そんな感じだよ。わたしはそれなの」

アルビノは先天的なメラニンの欠乏により皮膚や体毛が白く、瞳は毛細血管の透過により紅色を表す。

「……」

優月の崩れない微笑みに、久遠が複雑そうな表情をしていると、黙って傍にいた春日が声を出して机の上を片付け始める。

「さて、そろそろ帰ろうぜ」

「そうですねー」

それに同調する百瀬も声を出して場の雰囲気を変える。その二人を嬉しそうに眺めていた優月はふと思いついたように春日の名前を呼ぶ。

「あ、こーた」

「あん？ 何だ、優月？」

「今日の授業丸々サボってたて聞いたけど、何でかな？」

あくまで笑顔の優月だが、体から鬨気が出ている。その姿を見た



久遠と空音以外の部員が思いつきり後退あとずさった。そして久遠以外の全員の顔に冷や汗が浮かんでいた。

「へ？ それはだな……えーと」

「それから、透哉くんもサボったて聞いたんだけど」

「はひ？」

優月は、春日が冷や汗と脂汗を同時にダラダラと流しながら視線を彷徨わせている姿から視線を外し、今度は清澄に質問の標的を変える。思いがけない質問に元来臆病な性格の清澄が奇声を発した。

それを見た優月は再び春日に視線を戻した。

「ねえ、こーた……正直に言えば怒らないから」

「そ、その手には乗らないぞ」

子どもに言い聞かせるような優月の言葉に怯える春日。その姿に

優月は思わずため息を漏らした。

「ってことは、後ろめたいことをしてたんだ……」

「な、何のことやら……」

「ていつ！」

優月の言葉に視線を逸らしながら応える春日のおでこに、可愛い掛け声と共にバチンという音と衝撃が走った。

「ぐはっ！」

優月のデコピンによって春日は体を浮かせて吹き飛ぶ。優月はリノリウムの床に倒れ込んだ春日に歩み寄ってしゃがみ込んだ。

「よかつたね、太陽の下じゃなくて」

「あ、あほ……お、お前が、この部屋の照明を……LEDに替えた、から今までの数倍以上の威力だったぞ！ 頭と体がさよならするかと思っただぞ！」

「大げさだな、こーたは。ただのデコピンだよ？」

「ちげーよ！ ただのデコピンで人間が数メートル吹っ飛んでたまるか！」

暢気な優月の言葉に、春日は息も絶え絶えに言い返す。しかし、優月は春日の抗議を笑顔でバツサリと切った。

「えつとあれは？」

「いつもの夫婦喧嘩よ」

「いや、あれつて優月先輩の能力？」

二人のやり取りを見ていた久遠は何事も無いかのように後片付けをする空音に状況を訊ねるが、期待していた返事が返つてこずに困惑する。その様子に気が付いた優月が久遠の質問に答えた。

「これがわたしの能力……シャインプリンセス赫炳姫。光を糧かけに身体的能力を倍増させる能力だよ。大体の目安としては、ルクスの百分の一×私の身体的能力かな」

明るさによつて、肉体の強度だけでなく視力や聴力なども跳ね上がる優月の赫炳姫。シャインプリンセス

「ちなみに真夏の日中の太陽光は約十萬ルクスだ」

優月の説明に空音同様、机の上を片付けていた星崎が補足を加える。それを聞いた久遠は目を見開いた。

「え、それつて……真夏だと身体的能力が千倍つてことですか？」

「ああ」

ゲームセンターによくあるパンチングマシンで、優月が仮に三十キログラムしか出せなくても、千倍すると三万キログラム……単位を変えると三十トン。力士の張り手が五百キログラムほどなので、約六十倍はある。

頭の中でそんなことを久遠が考えていると、春日が額を押さえながら立ち上がった。星崎たちはいつもの恒例行事と言わんばかりに片づけを黙々と続け、最後に空音が机の上を布巾で拭いて終わった。

「あー痛う……さて、そろそろ帰るぞ」

部室内を見回して綺麗になっていることを確認した春日はゴミをまとめたビニール袋を持って部室から出ていく。他の部員たちも鞆を手に持ち、部室から出て行った。

星崎が鍵を閉めている横でビニール袋しか持っていない春日の姿に優月が頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「あれ？ こーた。鞆は？」

「きょーしつ」

「もう！ほんとに今日何してたの？」

「ひ・み・つ」

「てい！」

「ぶるげはっ！」

「さて、俺は職員室に鍵を返してくるよ。それじゃ」

「あ、僕も教室に鞆を置きっぱなしなので先に失礼します」

再び優月に春日が奇声を上げながら吹き飛ばされるのを気にするでもなく、西日に照らされた廊下を歩いていく星崎と清澄。

「それじゃ、部長に優月先輩。桃ちゃんたちもこれで失礼しまーす」

「失礼します」

「また明日ね〜」

百瀬と空音も春日のマウントポジションを取っている優月に疑問を感じるでもなく、ごく普通の挨拶をして歩き出す。優月も手をヒラヒラさせる。

「久遠くんも帰ろうよ」

「あ、え？……おお。春日先輩に優月先輩、失礼します」

「うん、バイバイ。久遠くん」

「オレを見捨てるのか、後輩たフゲツ！」

別れの挨拶をした三人は夕焼けに染まる廊下を歩いていく。角を曲がったところで何やら断末魔のようなものが聞こえてきたので、思わず久遠は訊ねる。

「なあ、あれって……」

「うん、……アレがああ二人の日常茶飯事だからそのうち慣れるよ」

「そ、そうか？」

「うん」

「ええ」

二人に頷かれたら久遠も納得するしかなかった。その後も度々、校舎内には男の悲鳴が響き渡った。

三人は下駄箱で靴に履き替えて下校する。前方には、久遠たちと同じように部活を終えた生徒がちらほらと歩いている。すると、数歩前を歩いていた百瀬がいきなり走り出した。

「あ！ みゆみゆ〜」

突然の大声に数人の生徒がこちらを振り向く。その中には二年A組に在籍する関川がうんざりした顔をこちらに向けてた。

「その呼び方はやめなさい、って」

飛びつかんばかりの百瀬に関川は頭をペシツと叩く<sup>はた</sup>。

「あうちっ！ うっ、なんで叩くのみゆみゆ？」

大して痛くない筈なのに、叩かれた場所を両手で押さえて蹲<sup>すくま</sup>る百瀬。

「ほう……まだ言うかね、バカ桃ちゃん？」

「さようなら、関川さんに百瀬さん」

「あ、さようなら、真崎さんに上倉君」

「ああ、また明日」

肩をフルフルと震わせる関川の横を空音は、二人に別れの挨拶をして通り過ぎ、関川も挨拶を返す。久遠も挨拶をして横を通り過ぎる。それを見た百瀬がまるで、貫一に許しを乞うお宮のようなポーズで二人を呼び止める。

「ちよっ！ お二人さん、桃ちゃんを忘れてるよ〜」

「間に合ってるわ」

「そ、そんな〜、く、久遠くんは？」

しかし、空音に素気無く断られた百瀬はターゲットを久遠に変えた。

「あ〜」

「アレも日常茶飯事だからいいのよ」

「だそうで。それじゃまた明日」

立ち止まりどうしたらいいか、と迷っている久遠に空音が先ほどの百瀬のように言い歩いていく。久遠も原因は百瀬にあると思っていたので笑顔で挨拶をもう一度した。

「か〜、無駄に良い笑顔だね、桃ちゃん惚れちまうよ」

「間に合ってるわー」

「ちよっ！」

「冗談だ、ジョーダン」

その笑顔を見た関川が少し顔を赤らめるその横で百瀬がふざけると久遠から先ほどの空音と同じセリフが返ってきた。それに対して、思わず大声を出す百瀬を見て、悪戯いたずらを成功させた子どものような表情をする久遠。

そのまま久遠は踵かかとを翻し、手をひらひらさせながら歩いていった。

「もう、久遠くんだったら……うん、ばいばい」

百瀬も手を振って別れの挨拶をする。

「朝とは随分と雰囲気が違うね、上倉君」

「そうだね。あれがきつと素の久遠くんなんだろうね」

「そうかもね。さてと……」

「あ、ねえねえ深雪。帰りにどっか寄ってかない？」

「いいわよ。って……あれ？ 私たち何か忘れてない？」

「へ？ うん……」

「あ？」

二人が声を出して顔を見合わせる。

その頃、職員室に鍵を返しに来た星崎はやたら機嫌の悪そうな顧問を見たという。

太陽はほぼ沈んで辺りは夜の帳に包まれていく。久遠と空音は微妙な距離感を保って帰路を歩いていく。

「すっかり暗くなったな。いつもこんな時間まで部活してるのか？」

「日によりけりね。でも今日はその中でも遅い方よ」

「ふ〜ん」

当たり障りのない会話を続ける二人の隣を車が何台か通り過ぎる。久遠は何気なくその光景を眺めていた。ボーっとしていると空音に自分の名前を呼ばれたので意識を切り替える。

「悪い、ボーっとしてた……」

「そんなの見てたらわかるわよ」

久遠の間の抜けた言葉に空音は溜息を吐く。

「それで何？」

「久遠君の家はこっちでいいのかと思って」

「ああ、俺の家は駅の向こう側だからこっちであってるよ。空音は？」

「私は駅の手前側」

少し前を歩いていた空音は歩行者用の信号機が点滅し始めたので無理をせずに歩みを止める。久遠も空音の横で立ち止まる。横断歩道の前で待つ二人の目の前を車が間断なく走っていく。

「……やけにパトカーが多くないか？」

道路に視線を向けていた久遠がボソツと呟いた。先ほどから数えて久遠がパトカーを見かけたのは今ので三回目。他にも自転車に乗った警察官も見かけている。

いくらなんでもこの数は多すぎる。そう疑問に感じた久遠の言葉に、歩行者用の信号機を見つめていた空音が答える。

「そうね。おそらく、最近この近辺で起きてる婦女子連続暴行事件の警戒でしょうね」

「え？」

空音の話す内容に久遠が思わず振り向く。そんな久遠を気にするでもなく空音は青になった歩行者用の信号機を見て横断歩道を渡る。辺りには通りゃんせが流れている。

「その数はもう十数件に上るわ。主な被害者は女性や子ども……多分、その犯人は腐ってんでしょうね」

前を歩く空音の表情は何えないが、言葉の端々からどこかイラついた感じがしている。

「だからパトカーが走り回ってんのか」

「でもね、この事件はそんなに単純じゃないみたいなの」

「それはどういうこと？」

「被害に遭った人たちの話によると、いきなり後ろから殴られたので振り返るとそこには誰も……何も見えなかったそうよ」

「それって犯人は……」

「ええ、十中八九で能力者でしょうね」

空音は歩くのを止めて振り返り、確かな嫌悪感を抱かせながら言い切った。後ろからは通りゃんせが鳴り終わってピーポー、ピーポー、とどこか薄ら寒い音が鳴り響いた。

「……だからCCPか」

久遠は先ほどの部室でのことを思い出す。わざわざ学生を公欠させてまで能力犯罪対策課で活動していたのは、この婦女子連続暴行事件の為なのかと……

「ええ、久遠君の能力がどんなのかは知らないけど、近いうちに駆り出されることになるでしょうね」

「……」

再び歩き始めた空音の言葉に久遠は黙ったままだった。

そこから程なくして空音の住むマンションに着き、別れの挨拶をした久遠は居候先の家へと帰る。

表に上倉と掲げられた家へと着くと、既に玄関先の明かりが点いている。どうやら家人がすでに帰宅しているようだ。

「ただいま」

久遠は挨拶をしてリビングへと足を向ける。リビングにはビール片手にキッチンで料理をしている白衣を着た若い女性がいた。

女性は帰ってきた久遠に気付いて振り返る。整った顔立ちで眼鏡をかけ、長く黒い髪をゴムで適当に結わえた女性は久遠を見てニカツと笑う。

「おう、おかえり。久遠」

「ただいま。ばーさん」

久遠は手に持った鞆を置きながら女性に近づく。

「だ・か・ら！ ばーさんはやめれ。あたしゃまだ二十代だ」

「もう下り坂だけだな」

「ああん？」

「ウソです。まだまだお若いです。だからその手に持った包丁をこつちに向けるのはやめてください、夏葵さん」

「そうだ、それでいいんだよ。久遠」

夏葵と呼ばれた女性はビールを一気に啣あおつて、くうー、っと親父くさい行動を取る。それを尻目に、久遠は冷蔵庫に作り置きしてあった麦茶をコップに注いで喉を潤した。

「で、神薙はどうだった？」

「まア、ぼちぼち」

「そうかそうか。ほれ、そろそろ夕飯だから皿出せ」

「ん……」

夏葵の言葉に従い、久遠は食器を取り出して料理を装よそっていく。料理をテーブルに並べた二人はテーブルに向かい合って座り、夏葵のいただきますに久遠が唱和しょうわする。

「それで、神薙での一日目はどうだったんだ？ 久遠」

お互いに箸を進めて食事に舌鼓を打つ二人。お互いに茶碗の白米



を大分消費した頃、有無を言わせない雰囲気では夏葵が先ほどと同じ質問をする。手に持った茶碗と箸をテーブルに置いて一思索する久遠。

「……そうだな、なんだかんだ言っただけで普通の学生って感じがしたよ」「そうか、それは良かったな。あたしも経験してみたかったよ。華のジョシコーサーってのをさ」

一応は保護者として、それなりに気にかけていた様子の夏葵は二カツとした笑みを浮かべて頷く。その笑みを見た久遠は郷愁を覚えた。

「そういえば……ばーさんは飛び級したって言ってたけ？」

「まあね……ってだから、ばーさんはやめれって」

当時のことを思い出す夏葵は頷いた後に聞き捨てならないとばかりに注意を入れる。

「ああ、悪い悪い。つい癖で」

「あたしにとつては随分と癪に障る癖だよ……ったく」

そう言っただけであつた日本酒を呷る夏葵。その姿を見た久遠はテーブルに置いた箸を手にとっておかずを掴みながら訊ねる。

「そういや、夏葵さんも神薙出身なんだっけ？」

「ああ、中等部の三年生までは……ってあなたにそのこと喋ったっけ？」

「うんや」

「ああ、真悟が教えたのか？」

「真悟？」

久遠は箸を止めて夏葵に視線を向ける。夏葵はコップに日本酒を注ぎながら答えた。

「来栖川真悟。あなたの担任で能運部の顧問だろ」

「へ？ 夏葵さんって来栖川先生と知り合い？」

「知り合いつてか同級生だ。で、真悟が教えたのか？」

「いや……」

どこか歯切れの悪い久遠。普通の流れでは否定した後にはっきり

とどこで知ったなど答えるものだが、それが一向にない。賢い久遠ならそんな間の抜けたことをする筈がない、と考えた頃にようやく夏葵は一つの推測に思い至った。

「……ああ、あたしが教えたのか」

「そ」

複雑そうな表情をしている久遠を見た夏葵は話題を変える。

「なるほどね……んじゃ、これは知ってるかどうかわかんないから言っとくわ。生徒会とはあんまり関わらない方がいいよ」

「生徒会と？」

「そうだ。生徒会は財閥やら政治家の子女がなる仕来りだ。あまり目を付けられるとあたしに迷惑がかかる」

「自分のためかよ……」

「あたしが大変ってことは、あんたの生活も大変になるんだからそこんところ覚えておきな。……ま、能運部に入った時点でもう目を付けられたも同然だけどね」

「それってもう手遅れじゃ……」

「そうさね。あたしん時から能運部と生徒会は仲が悪かったから、今じゃ相当根深くなってるでしょうね」

「めんどくさ……」

久遠は嘆息すると、再び箸を動かし始めた久遠がふと思いついたように訊ねる。

「そういえば……今日はもう研究無いのか？」

「んー、九時頃に迎えにくることになってる。元々今日は今やっている実験の結果が出るまでの時間潰しで帰ってきただけだからね。ま、丁度溜まっていた家事をやるのに都合がよかったし、何よりあんた……久遠の顔も見たかったしね」

「あー、最後に会ったのって五年前だっけか？」

神薙学園の編入やその準備に住民票やらの手続きをする際に二人は会っているが、慌ただしく動いていたので落ち着いて向かい合うのは今日が初めてだった。

「そうさね。あんたが忽然と姿を消したのには驚いたよ」

「あれは、まア……若気の至りというか……」

「帰ってくるまで五年間もどこにいたのさ？」

「……黙秘権を行使しても？」

「ハア……あんたが消えてくれたお蔭でこっちは大慌てだったけど……ま、あのウザったい所長の青褪めた顔が見れたのは痛快だったけど」

「でも、定期的に連絡は送ってただろ」

「年に一、二回が定期的っていうのか、あんたは？」

「いや、まア……」

「ハア……もう過ぎたことだからいいけど、これからは家族として一緒に暮らすんだから連絡はちゃんとすんだよ。ってことでコレ」  
「……コレって？」

夏葵は白衣のポケットからオレンジのマークが描かれたスマートフォンを取り出して久遠に渡した。久遠は受け取ったスマートフォンを繁々（しげしげ）と見る。

「久遠も高校生なんだし携帯の一つや二つは必要だと思ってね」

「ああ……そう言うことか。確かに今日もやたらとメアド交換しようって言われたな」

「へー、それって女の子？」

目を爛々と輝かせて夏葵がテーブルに乗り上がった。そこら辺はどんなに親父くさい行動を取ろうと、恋バナが好きな女子と変わらないようだ。

「いや、そりゃ女子もいたけど……」

そう言って久遠は今日手渡されたメールアドレスや電話番号が書かれた紙を制服のポケットから取り出した。その内いくつかは可愛いらしい封筒で、中身を見てみるとこれまた可愛い紙に女子らしく書かれた丸文字とプリクラが貼ってあった。

それを覗き込んだ夏葵はニヤツと笑う。

「ほほう……随分とモテてるみたいだね。流石あたしの……いやい

や、あたしは認めないよ……ま、あたしとおんなじ血が流れてるんだ。当たり前っちゃん当たり前だね」

「ソウデスネ」

「あにさ」

「いや、夏葵さんの方は出会いとかどうなのかな、って思って」

「どうもこうもあるかっての！」

そう言っつて日本酒をコップに並々と注いで一気に呷る夏葵。段々と目が据わってきた。

「大体、どいつもこいつもヒョロツとした奴ばっかしで、人と話す時も目なんか合わせやしない」

夏葵はその後、愚痴を延々と喋りながらも日本酒を呷り続け、最終的にはテーブルに突っ伏し、寝入ってしまった。

「いい年して……ったく」

ため息を吐いた久遠は、夏葵の眼鏡を外して自分の上着を掛ける。それからテーブルの上を片付けて食器を洗う。

九時を過ぎた頃にタクシーが迎えに来たので、久遠は夏葵を起こす。夏葵はすぐに準備をしてタクシーに乗り込んだ。

「そんじゃ、行ってくるよ」

「ああ、いつてらっしゃい」

「当分は帰ってこないけど、お金はとりあえずアンタの口座に振り込んであるからそれでやり繰りしな。それから、戸締りや火の元はちゃんと確認するんだよ」

「ああ、わかってるよ」

「それと、あたしがいないからって調子に乗って女の子を家に上げてもいいけど、その時はちゃんとその子の安全日も確「あ、運転手さん。もう行ってください」あ、ちよつと、話はまだ終わ……」

タクシーは静かに住宅街を走って行った。タクシーの後部座席から何か叫んでる夏葵が見えたが久遠はそれを無視する。

「さて、風呂入って寝るか……」

濃い一日を過ごした久遠は体を伸ばして家に戻っていった。



翌日の四月一六日、火曜日。余裕を持って目を覚ました久遠は制服に着替え、朝食を取って神薙学園へと向かった。

ホームルームの始まる時間の一五分前に教室へと着くと、生徒の人数は疎らまばだった。自分の机に鞆を置くと前に座っていた空音が手元の文庫本に菜を挟んで挨拶をする。

「おはよう。久遠君」

「ああ、おはよう」

二人が雑談していると近づいてくる影が一つ。久遠がそちらに目を向けると、髪を茶色に染め、制服を着崩した派手目の男子がツカツカと歩いてくるのが見えた。心なしか不機嫌そうな表情をしている。

「はよーっす、空音」

「……おはよう。茅原君」

「コイツが転入生の？」

茅原と呼ばれた男子は座ったままの久遠を見下し、どこか値踏みするかのような視線を向けてくる。居心地の悪い久遠はとりあえず自己紹介をすることにした。

「上倉久遠だ。えーと……」

「俺様は茅原義博ちほらよしひろだ。空音やお前と同じく能運部に所属だ」

不遜な態度で名前を告げた茅原は久遠と空音を交互に見やる。その後空音の机の上に置いてある菜の挟まれた文庫本を見る。普段の空音は読書を中断をしてまで誰かと話すことはないということを知っている茅原はギロツとした目で久遠を睨む。

「一日で随分と仲良くなつたみたいだな、俺の空音と」

「へ？ 空音の彼氏さん？」

茅原の言葉から久遠は一つの考えに思い当り訊ねてみる。

「そうだよ。っーか、なに人の女を呼び捨てしてんだよ」

「ああ、気にしないで久遠君。彼はちよつと虚言癖があるの」

しかし、すぐさま否定の言葉が空音から発せられた。まるで地球は青いです、と当たり前のことを言うかのように空音の言葉に茅原の顔が若干引き攣る。

「つれないこと言うなよ、空音……つてか、空音までコイツのこと名前で呼んでるのかよ！」

「それが？」

「なら俺様のことも名前で呼んでいいぜ」

「結構よ、茅原君」

「ぐはっ」

空音の容赦ない言葉に茅原は奇妙なりアクションを取ってリノリウムの床に崩れ落ちた。見た目の割にどうも芸人気質のようだな、と心の中で思う久遠だった。

「二人ともおっはよ〜！ 今日もいい天気だね」

大声で教室に入ってきた百瀬はスタスタと久遠と空音の所まで歩いてくる。途中で茅原が床に崩れ落ちているのを一瞥いちへつした百瀬は戸惑うことなく、その背中を踏みつけた。

「ふぎやつ！」

百瀬に踏みつけられた茅原は奇声を発する。それを気にするでもなく笑顔でいる百瀬に久遠は顔を引き攣らせる。

「お、おはよう……」

「おはよう、百瀬さん」

「うん、おはよう」

「あのさ、空音……これも日常茶飯事なのか？」

「そうね」

「さいですか……慣れるのに時間が掛かりそうだ」

久遠が嘆息していると教室がざわめく。視線を上げると来栖川が廊下を歩いているのが見えた。そのまま視線を時計に向けると、長針がホームルームの始まる時間を指していた

「それじゃね〜」

百瀬は再び茅原を踏みつけて自分の席に戻っていった。

「席に着けー」

ガラツと教室の扉を開けて来栖川が入ってきた。茅原も何とか復活して廊下側の自分の席へと戻っていく。背中に付いた二つの上履きの跡が何やら虚しさが感じられた。

「あー、今日は全員いるな。……お前ら、最近この近辺で婦女子連続暴行事件が起きてるのは知ってるな。昨日、神薙ウチの生徒が被害に遭った」

教室全体を見回した来栖川は出席簿に記入をする。そして、再び教室全体を見回し、深刻そうな顔つきで告げた。その言葉に教室内がざわめいた。

転入二日目の火曜日つがなは朝のホームルームでの来栖川の報告以外は恙無く過ぎていった。

放課後になり、能力運用部の四人は部室へと足を向けるが、皆の口数は少なかった。部室に入ると既に三年生の三人と見知らぬ綺麗なブロンドの髪をウルフカットにした女子がいた。髪型と中性的な美貌に野良猫を思わせる金眼とが相俟って、凜々しいといった言葉がよく似合う。

「おう、お前らか」

「こんにちはつす。春日先輩」

茅原の挨拶に残りの三人が続ぎ、優月と星崎も続いた。

「昨日はご苦労さんだったな、茅原」

「いや、なんの成果も上げられませんでしたけどね……」

「……」

春日の言葉に茅原は悲痛な面持ちで言葉を返す。春日の隣に座っている優月も同じ表情をしている。

「……とりあえずお前らも席に座れ。生徒会副会長様が直々に、我らが能運部に相談があるんだとよ」

「フンっ……」

四人は春日の言葉に従い、それぞれ席に着く。副会長は不機嫌そ



うに鼻を鳴らし、視線を久遠に合わせて目を細める。

「新顔だな……君が噂の転入生か？」

「はい、昨日二年A組に転入してきた上倉久遠です」

「そうか、私はこの神薙学園高等部の生徒会副会長をしている鷹匠たかじょうだ。こいつらと同じ三年A組に在籍している」

鷹匠はそう言うって久遠に手を差し伸べてきた。それに応えるために久遠も手を伸ばして握手をした。

「ちなみに下の名前は茉莉花と書いてルビはジャスミンと読む」

「鷹匠茉莉花、先輩ですか……」

春日の注釈に鷹匠は顔に青筋を立て、口元をヒクヒクさせている。どうやら、相当自分の名前にコンプレックスを感じているようだ。

「おい、その年中お祭り騒ぎ金髪馬鹿頭。次、私の名前の話題を出したらその金髪を全て塗り取って違う意味でその頭を輝かせてやる。つてか、いい加減黒髪に戻せ」

「お前の髪だつて黒じゃねーじゃん！」

「私のは地毛だ！」

「ならオレも地毛だ」

「嘘を吐くな！ 初等部の頃は黒髪だつただろうが！」

「オレは今を生きる男だ。過去のことは忘れたぜ」

「ならこれを見る！」

鷹匠は制服の内ポケットから生徒手帳を取り出し、その中に挟まれた一枚の写真をバンスと春日の前に叩きつけた。その写真には幼い頃の春日と鷹匠に優月や星崎、それから見知らぬ二人の男の子と女の子が写っている。

「へー、懐かしいな……これって小三の頃だっけ？」

「あ、ホントだ。この頃のこーたは可愛かったな」

叩きつけられた写真を手に取り、懐かしげに話す二人の言葉に鷹匠も腕を組んで頭を頷かせている。

「確かにこの頃の泷太は可愛か……つて違う！ 見ろ！ この時の貴様の髪は黒だろ！」

「……髪の色なんて些細なことを気にすんな。学生の本分は学業だろ？ オレはその本分をちゃんと果たしているぞ？ 学年順位四番さん」

「ぐっ……高々数点の差で一つ上の順位だからといって調子に乗るな！」

神薙学園の学力レベルはかなり高い。その中で春日は見た目や行動からは信じられないほどの好成绩をキープし続けている。さらに全国模試などでもかなりの上位に食い込んだり、英語のスピーチコンテストや書道コンクールなどにも積極的に参加したりして多方面で神薙学園の知名度を上げている。だからこそ、多少の好き勝手をしても教師から何も言われないでいるのだが……

「その割には一度もオレのこと超えられないな」

「ぬぐっ……って論点を変えるな！ 校則で頭髮の染髪は禁じられてる！」

「なあ……お前の好きなこの日本には、郷に入っては郷に従えという言葉があるよな。その言葉から考えるに、お前のブロンドこそ黒髪に染めるべきではないか？」

「なっ……確かにそうかもしれ」

春日の言葉に鷹匠が俯うつむいて考え込むが、すぐさまゴスツという音が部室に響いた。

「へっ？」

その音に鷹匠が視線を正面に上げると、机にヘッドバッドをしている春日の姿。その頭の上には隣に座った優月の手がある。

「もう……いい加減にしなさい、こーた。鷹匠さんもそんな綺麗な髪を染めるのは勿体ないよ……」

「い、いや……私の髪なんて……優月さんの方が女の子らしい長くて白い髪で、神秘的なまでに美しいと思うぞ」

「そ、そんなこと言われたら照れちゃうよ……」

「で、相談するのは婦女子連続暴行事件についてか？」

女子二人が互いの髪について褒め合っていると、額を赤くした

春日が復活する。そして、先ほどまでの姿からは信じられないほど真面目な表情で鷹匠に訊ねた。

「う、うむ……今までも注意を投げかけていたが、ついに昨日神薙さくじつウチの生徒が襲われたのは知ってるな？」

「ああ、CCPからも情報が入ってきた」

「やはり能力者絡みだったか……」

春日の言葉から婦女子暴行事件の犯人が能力者だと確信した鷹匠は静かに呟く。

「こーたのバカ……」

「ぐっ」

「いや、最近の貴様たちの様子を見れば察しはつくよ、優月さん」

春日の失言に、隣の優月からボソツと非難の声が上がられた。それに対して鷹匠は苦笑しながら話すので、優月も苦笑する。

「そ、それもそうだよね……」

「本来なら警察に任せておくのが正しいのだろうが……私は学園の生徒が襲われたのが非常に気に食わんっ！ だから、貴様たち能運部に依頼に来たのだ」

颯爽さつそうとした態度で鷹匠が言い放つと、春日も慨然がいぜんとした態度で話し出す。

「俺たちも神薙の生徒が襲われたとあっちゃ黙ってないさ。今まではCCPの仕事でしか動いてなかったが、今日からは能運部としても動くぞ」

「そうか……それは有難い」

春日の言葉に鷹匠は嬉しそくに微笑む。

「で、だ……まつり。それは生徒会の総意か？ 別に黙っててもオレらが動くのはわかってただろ？ 副会長のお前が能運部に依頼なんかすれば生徒会内部から批判もされるだろうに……」

「確かに、な……それでも私は同じくこの神薙学園を愛する洗太アイトに、私個人として頼みに来たのだ。難しいことは知らん。それに会長もわかってくれるさ……」

「そうか……なら、オレらも幼馴染からの依頼とあつちや気合を入れるしかないな……」

「そうだね！」

「ああ」

春日の言葉に優月と星崎も同意する。その言葉を聞いた春日は席から立ち上がり、部員の顔を見回す。

「そうと決まれば……星崎は奥のパソコンでCCPの把握している情報にアクセスして通り魔について纏めろ！百瀬は街中に鳩を飛ばして随時、星崎と連携！茅原は星崎たちの纏めた情報で割り出された、次に犯行が行われそうな場所を重点的に予知しろ！」

春日の指示に名前を呼ばれた三人は勢い良く返事をした。百瀬は部室から出て鳩を街中に放してくると、星崎と茅原と共に部室の奥にある扉へと消えていった。

ちなみに部室は幾つかに仕切られており、奥にはキッチンや娯楽室、シャワールームなどが設備されている。娯楽室には普段部員がネットサーフィンなどで利用しているかなり高性能ハイスペックのパソコンが三台あり、有事の際にはそのパソコンからCCPにアクセスしている。

「優月は犯行場所と時刻の予測が立つまで部室で待機！真崎は……この時間は能力が使えなかったな……お前も部室で待機だ。くそっ、こんな時に限って一年はCCPの研修かよ……」

次に名前を呼ばれた二人はコクッと頷く。春日は清澄を含めた一年生トリオがいらないことについて忌々（いまいま）しげに呟く。その呟きに優月が春日に進言する。

「でも、代わりに久遠くんがいるよ」

「そうだったな……上倉、お前の能力ってのはどんなのだ？」

「……俺の能力は……物質の時間停止です」

春日の真剣な眼差しに久遠は少し戸惑った様子を見せた後、自身の能力を伝えた。春日は指先で蟀谷をこめかみコンコンと叩きながら真剣な表情をしている。

「大まかでもいいから能力についてと制限や条件なんかを教えてください」

「……俺の能力は停視勢ストップモーションって言って、視界に映った物の時間……要は動きを止めます。但し、対象は物質……非生物に限ります」

「他に制限とかは無いか？」

「……視界に入れ続けている間は効力がありますが、視線を逸らしたり封じられたりすると効力は消えます」

言葉を選ぶかのような久遠の説明。しかし、状況が状況だけにそのことを指摘するものはいなかった。

「なら、お前の能力もそれなりに実戦向きだな。星崎たちの結果が出たら上倉にも現場に行ってもらおうぞ！」

そう言い残して部屋かの奥へと行った春日の言葉に、何故だか昂揚こうよう感が湧いてくる久遠は少し首を傾げた。その姿を見た優月は久遠の心中を察して穏やかに微笑んだ。

「こーたの能力は御旗煽動スタンダードスターって言ってね、ある行動を取るように人の心を掻き立てるの。そして、わたしたちはこーたが旗手となって先導しているその間は最高のコンディションでいられるんだよ」

「そうなんですか……」

「それに何度助けられ、何度苦しめられたことか……」

優月の説明に久遠が納得していると、鷹匠がどこか嬉しそうに呟く。

「さて、私はそろそろお暇いそさせてもらおうよ。ここにも何の役にも立てないからな……後は頼んだよ、齋」

「了解だよ、まつりちゃん」

鷹匠は嘆息をすると席を立ち、部屋を出ていった。優月は穏やかな微笑みを浮かべてその後ろ姿を見送る。

「先輩方は初等部からの付き合いなんですか？」

「うん、わたしとこーたや賢くん、まつ……鷹匠さんは初等部入学からの仲なんだよ」

先ほどのやり取りや春日たちの言動から久遠は優月に疑問を訊ねる。それに対して優月は少し複雑そうな表情で答えた。

「……さっきの写真にもう二人写ってましたよね。あの二人は？」

「よく……見えたね、あの一瞬で……」

「目だけは鍛えてあるんで」

「そっか……うん、男の子は宍戸怜治くんって言って、今の生徒会長なの。女の子の方は神楽麻衣さんって言ってわたしたちの一つ上なんだ」

「それじゃ神楽さんはもうこの学園を卒業してないんですね」

「……卒業はしてないけどもう麻衣さんはこの学園にいない、かな……」

何気なく呟やいた久遠の言葉に優月が肩を震わした。優月の辛そうな表情を見て久遠はそれ以上言葉を紡ぐことを止める。思考はいくつも枝分かれし、最終的に昨晚の夏葵の言葉について考える。

「さて、わたしもそろそろ準備しなきゃね」

何やら黙考している久遠の姿を見て安堵の溜息を吐いた優月は席から立ち上がる。優月はポケットから鍵を取り出して部室に備え付けられたロッカーを開ける。そして、ロッカーの中から色々取り出して机の上に並べていった。

空音はその並べられた物をいくつか手に取って吟味ぎんみしている。それを見て、昨日で全てを悟り、とりあえず受け入れようと思っていた久遠だが、思わず頭を抱え、ロッカーから取り出した物を空音同様に吟味している優月について質問を投げかける。

「あの、優月先輩。一つお伺いしたいのですが……」

「何かな？」

「その手に持つてるのって、もしかして……スタンガンですか？」

「うん、そうだけど……それがどうかしたの？」

何を当たり前な……といった表情の優月の顔を見て茫然とする久遠。空音に目を向けると静かに首を振られた。

「こっちは警棒に催涙ガス、それからスタングレネード……SAT  
かテロリストみたいな装備ですね」

「一応わたしたちCCPに所属してるからテロリストは勘弁かな」  
「そうでしたね……でも、これって過剰防衛とかになりませんか？」

机の上に並べられた物を見て思わず呟く久遠の言葉に優月は少し困ったような表情をした。

「うーん……今回は結構過激な相手だし……というかわたしの能力  
って力加減間違えると危ないからスタンガンとかの方が相手にとっ  
て安全なんだよね」

優月の言葉に顔が引き攣る久遠だった。

「それはスタングレネード……ではないですね」

「これはフラッシュバン。わたしの能力って光ありきのものだから  
ね」

そう言ってフラッシュバンをいくつか身に着ける優月。空音もい  
くつか身に着けたようだ。

「久遠くんも何か装備しておく？」

「いえ……俺は遠慮しておきます。使い方もよくわからないので」

「うん、生兵法は大怪我の基って言うもんね」

「空音はもう慣れたのか、これに？」

久遠は警棒を手に取り、ジャキンと警棒を伸ばしながら訊ねる。  
しかし、その扱い方はどこか堂に入ったものだった。

「それなりに、ね……できたらこんなモノに関わらない人生を歩  
みたかったけど」

「今回は部室待機でもいいよ？ 空音ちゃん」

その自嘲的な言葉に優月は心配げな表情を浮かべるが、空音は首

を静かに振り、強い眼差しを持って応える。

「いえ、参加します。能力を犯罪に使うような奴がいるから私たちへの風当たりが強くなるんです。それに　　ううん、そんな奴にはしっかり引導を渡してやらないと……」

何か思いつめた表情の空音に「そっか」とだけ返す優月。その様子を警棒で肩をトントンと叩きながら見つめる久遠だった。

優月が使わない装備をロッカーに仕舞い始めていると、手に何かの紙を持った春日が扉を開け、ホワイトボードの前まで歩いていく。そして、手に持った紙　　地図をホワイトボードに張り付け、ある地点に赤丸を書き込んだ。

「次の犯行予測が立ったぞ！　おそらく通り魔は二〇一〇頃ふたまるひとまるにこの場所　人通りも街灯も少ないこの道で神薙ウチの女子を襲う」

「やっぱり夜かあ……せめて夕方なら良かったのに」

春日の言葉に優月は落胆の声を上げた。

「ああ、優月の能力が発揮されないのは痛い」

「通り魔の特定はできたんですか？」

「いや、男ということしかわかってない」

「そっか……一応CCPに報告しとく？」

久遠の質問に春日は首を振って答えた。それを聞いた優月は再び落胆の声を上げ、春日に訊ねる。

「……いや、今までなかなか尻尾を出さなかった相手だ。相当に用心深いんだろう……だから、今回は少数精鋭で叩く！　CCPなんかに報告したら機動隊並の部隊が出動する。そしたら犯人は動かなくなるだろうしな」

「それもそうだね……でも、今まで尻尾を出さなかった割に、今回は義博君に捕捉されたね。こーたの能力補正のお蔭かな？」

春日の言葉に納得した優月は新たな疑問に首を傾げた。

「茅原の前知敷は様々な要因が絡み合って成立する確率論みたいなところがあるから、今回は前回足りなかった何か働いたんじゃないのか？　それがオレの御旗煽動スタンダードスターなのか通り魔の不手際なのかはわ



からないけど」

「うん……昨日はあんなに頑張ったんだけどな」

優月は春日の考えを聞いて少し落ち込む。昨日は学校を公欠してまでＣＰで働いたのに、目に見えた成果が出なかったからだ。しかし、春日の言葉を聞いてすぐに元気になる。

「昨日は昨日、今日は今日だ。思考を切り替える、なずな」

「うん、そうだね！」

話が途切れたところで奥の扉から星崎、茅原、百瀬の三人が戻ってきた。星崎は手に持った人数分の資料を全員に配る。

「さて、全員揃ったな……今、巷ちまたを騒がせてる通り魔は、被害者の証言から考えるに、おそらく姿を消す能力者だと想定される。いつものオレらの作戦としては、事前に神薙の女子の安全を確保してから囮作戦をしたかったんだが……」

「今回は清澄たち一年生がいないな」

春日の言葉を星崎が補足する。それを聞いた春日は頭を掻きながら苦々しげに喋る。

「そうなんだよな……元々、囮作戦ってのはアイツらありきの作戦だからな。しかも、夜だと優月の安全も確実じゃない。百瀬や真崎も同じ……どうしたもんか……？」

「わたしならいけるよ」

「ダメだ。日中や明るい場所ならまだしも、今回の場所はあって街灯の光程度。そんなところでお前を囮にできるか！」

頭を抱える春日の呟きに優月が囮役を志願する。しかし、すぐさま春日に却下される。

「でも、フラッシュバンもあるし……」

「それはあくまで一瞬だ。相手の能力は姿が消せるっていう情報しかないのに、そんな無闇なことさせられるか！」

あくまで食い下がる優月だが、それでも春日の意見は変わらない。春日の指摘に優月は食い下がるのをやめる。

「そ、うだね……」

「私が囷になります」

「は？ お前の能力は今使えない……ってどつちにしろダメだ。不確定要素が多い中で危険な真似は絶対にさせられない」

今まで静かに資料を見ていた空音の立候補に春日は首を振って却下する。だが、空音は資料に目を通しながら自分の考えを述べる。

「通り魔が姿を消した状態でも被害者が暴行を受けたってことは、相手の姿は見えなくても実体はあるってことですよね？ なら、百瀬さんの能力で犬の嗅覚を使うなり蝙蝠こうもりの超音波を使うなりして通り魔の位置を特定すれば危険度はかなり下げられます。後はフラッシュバンでもスタングレネードを使って通り魔を怯ませてから優月先輩やみんなで飛び掛ければ……」

「むづ……」

空音の話に春日が思わず低い声で唸うなる。すると、空音はさらに自分の考えを述べて外堀を埋めていく。

「誰かが囷をしなければ通り魔は現れませんよ。優月先輩と百瀬さんは役割があつて私にはありません。それに被害者の傾向からみてこの囷役は女子じゃなきゃ意味がない……消去法から考えて私が囷役になるのがベターです」

「だけどな……」

空音の言葉に尚も反論しようとする春日の言葉を茅原が遮る。

「春日先輩、空音が女をみせるって言うてんツスよ。それにこの俺様が空音には通り魔の指一本触れさせません！」

「私も街中から動物みんなを集めてバツクアップします！」

百瀬も茅原の言葉に便乗して後押しをする。その二人の姿を見た空音は目を丸くした後、口許を少し緩ませる。

「期待してるわ」

「お前らなあ……」

二年のやり取りを見ていた春日が頭に手を当てる。すると、春日と同じ三年からも空音の提案に肯定的な意見が出る。

「もう何を言っても決心は固そうだぞ、春日」

「そうみたいだね……それに心配も大事だけど……ここは空音ちゃんたちを信頼してあげようよ。ね、こーた」  
「ったく……そうだな。ああ、わかったよ。今回は真崎が囿で征くぞ！」

星崎と優月の言葉で決心がついたのか、春日は半ば諦めたような様子で机をバンツと叩き、囿役を空音にすることに決定した。

具体的に作戦を詰めてく春日たちの会話を意識半分で頭に入れながら、久遠は手元に配られた資料を熟読し続けていた。時偶、春日や百瀬などから話を振られるとそれに応えるが、それ以外はずっと資料を見続ける久遠に空音は首を傾げる。

何故そんなに怖そうな表情をしているのか、と……

時刻は午後八時五分。

被害に遭う筈だった女子を事前に特定し、事情の説明をした能力運用部。現在はその女子がいつも通っている道を空音が犯行予測地点まで歩いてきているところだ。

空音以外の部員は犯行予測地点の道に面した建設中の家の敷地内で待機している。僅かな月明かりの下、目を瞑り意識を動物縁アニマルリンクに集中している百瀬に状況を訊ねる春日。

「そろそろ時間だな……百瀬、真崎の周りに不審人物はいるか？」

コンビニで買い漁ってきたおにぎりを無理やりお茶で流し込みながら訊ねる春日。百瀬はチョコレートで糖分を摂取しながら目を瞑り、意識を集中している。

「……いえ、特に怪しい人物が空音ちゃんをつけているってことはないみたいです」

「その情報の信用度は？」

「犬の嗅覚と蝙蝠の超音波なので間違いはないかと」

「ふむ……この辺りでオレたち以外に怪しい奴は？」

「……特には」

「そうか……とりあえず警戒だけは怠おこたるなよ」

「モチのロンです」

春日の言葉に緊張を隠すかのようにいつもと同じ調子で返す百瀬だった。

「……そろそろあのT字路を空音ちゃんが曲がってきます」

「変わったことはあるか？」

「……そのT字路を直進してくる人間……何だろ？ 棒状の物を持っていきますね。嗅覚と聴覚では確認が取れますが視覚では見えませんね……通り魔トウキョウマです」

春日は時計を見ると時刻は八時八分。犯行予測時刻通りのようだ。

春日は繋ぎっぱなしだった携帯電話に喋りかける。

「そうか……真崎、通り魔が釣れた。今後ろを通り魔が歩いている」  
長い髪で隠された空音の耳にはイヤホン。春日の言葉に返事をするために空音は歯を鳴らした。

『カチッ』

空音からの合図も得られた春日は視線を携帯電話から周りの部員に移す。

「初めから姿を消してるってのは随分と慎重……いや、卑怯だな。しかも、自分より弱い婦女子ばかり狙う。必ずここで捕まえるぞ、お前ら」

「ああ」と星崎。

「うん」と優月。

「おう」と茅原。

「りょーかい」と百瀬。

「はい」と久遠。

春日が喝を静かな声で入れると見事にバラバラな返事が得られた。「いや、そこは合わせようぜ……なんか締まらなねーけど、それじや作戦通りに征くぞ」

その言葉を皮切りに百瀬の動物縁で集まった犬と蝙蝠アニマルリンクが通り魔の後ろ数メートルの位置を確保する。そして、動物縁に集中させるために星崎が百瀬を背中におぶり、部員全員で空音の前に飛び出る。空音もすぐさま春日たちのところへと走った。

「その姿を消した通り魔野郎。大人しく投降するってなら危害は加えねえ……ただし、抵抗したり逃げたりしようってなら……潰す」  
春日は皆より一歩前の位置に立ち、言葉を投げかけるが通り魔からの反応は無い。

「……百瀬、ヤツは今どこにいる？」

「こっから前方約五メートルの位置にいます」

「見えないってのは厄介だな……確か棒状の物を持つてるんだっけか？」

「はい、それで……あつっ！」  
「ぐっ……」

眉間に皺を寄せながら呟く春日の言葉に百瀬が答えようとすると、その言葉が途中で小さな悲鳴に変わった。そして、星崎からも呻き声が上がリ、ドサツと百瀬が地面に落ちる音が聞こえる。その異変にすぐさま振り返り、二人の心配をする春日。

「百瀬、星崎、どうした！」

「多分……エアガンか、何かで、頭を、撃たれ……た」

「大丈夫なのか！」

春日の言葉に星崎が顔を手で押さえながら自分の推測を述べる。

百瀬も額を手で押さえている。心配する春日の言葉に百瀬はすまなさそうな顔をしながら言葉を細々と紡ぐ。

「それ、より……も、動物縁が、アニマルリンク解けちゃ……いました」

「そんな事ぁいい！ くそ！ 女子は男子の後ろに……ぐっっっ！」  
「こーた！」

百瀬の弱々しい言葉に春日は声を荒げて指示を出す。その言葉の途中に再度、通り魔の攻撃が襲いかかった。呻き声を上げる春日に優月が叫び声を上げながら駆け寄る。

『変な正義感振りかざしてるからそうなるんだ』

そこで初めて通り魔が声を出す。その声は幼く、しかし、春日たちをせせら笑うようものだった。

「ッ痛……通り魔か？ ぐっっ！」

『だったら何だ？ 僕を潰すんだろ？ どうした、早くやってみろ！ それができるならね』

通り魔からの言葉に春日が声のする方向を睨み付けるが、再び攻撃を受ける。

「こーたに何てことするの！」

「やめろ！ なずな！」

春日への攻撃に普段は温厚な優月の沸点が超える。春日の制止の言葉を見無視し、優月は怒りに身を任せて胸元から複数のフラッシュ

バンを取り出し、時間差をつけてピンを抜き投げつける。

数秒後、辺り一面は眩い光の世界で満ちる。優月は先ほどまで声が聴こえてきていた位置に向けて突っ込む

「あ、れ？」

が、それは空振りに終わった。

『今のは閃光弾、ていうやつかな？ ゲームでは良く見るけど実物を見たのは初めてだ』

通り魔の声は優月の真横から。既に光の世界は終わりを告げ、優月の身体的能力はそこらの女の子と変わらないものになっている。

そこへ通り魔の無慈悲な一撃が襲いかかる。

「きゃあっ！」

『声を頼りに特行をしてきたみたいだけど、いつまでも同じ位置にいると思う？』

「く……あっ！」

「優月先輩！」

脇腹を思い切り殴られて道路に倒れ込んだ優月をせせら笑う通り魔。そして、道路に横たわる優月を踏みつける。その姿を見て空音と茅原が叫ぶ。

「ならこれはどうだ！」

苦しむ優月を見て茅原は犯人対策として持っていたペンキを思い切り通り魔の声がる位置へとぶちまける。

『消える』

「なっ……」

しかし、その行為も通り魔の一言で無駄に終わる。ぶちまけられたペンキの大部分は透明になり、ビツシャっという音以外大きな変化は起きなかった。ただ、数多の飛散したペンキが放射状に道路へと広がっている。

『なかなかいいアイデアだったけど、僕の触透色クリアオブタッチは触れた物を透明にする。残念だけど僕に色は付けられないよ』

「うがっ！」

「茅原君！」

『狩りはこうでなくてはね』

茫然としている茅原の顔へと数発の攻撃が襲いかかり、思わず道路へとへたり込む。その姿を見て通り魔は満足そうに呟いた。

『けど、いくら透明にできるからといってもペンキを体にかけるのは不快なんだよね』

「うっ！」

通り魔は苛立った声を上げながら茅原へと追い打ちをかけた。

「だったらこれは？」

そこにきて、今まで傍観していた久遠が初めて行動する。

「ポップコーン？」

空音は道路に撒かれた白い粒を見て呟く。空音の言う通り、道路には多数のポップコーンが撒かれていた。

「これでお前がその場から動けば地面に撒かれたポップコーンが教えてくれる。どうやらお前の能力は物を透明にするだけで実体は透過しないみたいだしな」

『小癩こじやくな……』

「声で何となく思っていたが……まだ、ガキだな。話し方もアホ臭い」

久遠の挑発に通り魔が声を荒げて攻撃する。

『黙れ！』

「BB弾、か……ひとまず殺傷力まではなさそうで安心したよ」

しかし、その行為も虚しく、全て久遠の目の前で停止している。

通り魔がどうやら引金を引いているようだが、弾切れのようだ。

『な……くそ！』

「……」

通り魔は怒りに我を忘れたのか、ポップコーンを踏み潰しながら久遠へと襲い掛かる。

『あ、れ……どうして動かない、んだ？』

が、その手に持った凶器を久遠の振り下ろすことは叶わない。



「その手に持つてるの……少しペンキ付いてるぞ」

『それが、どうして……動かない、ことに、関係……するんだよ!』  
久遠の指摘に通り魔は声を荒げる。どうも空中に固定された凶器を無理やり動かそうと奮闘しているようだ。ただ、怒りに我を忘れていたとはいえ、その行為は明らかに失策としか言いようがない。

相手に姿が見えないというアドバンテージを自ら捨てているのだから……

「それを教えてやるほど俺はおしゃべりじゃないんでな」  
『ぐはっ!』

久遠は見えなくてもわかる目の前の通り魔に対して強力な蹴りを繰り出した。その蹴りは見事に通り魔の脇腹に当たり、思い切り吹き飛ぶ。

通り魔は道路に倒れ込む。突然の痛みで触透色の効力が切れたか、クリアオプタッチ通り魔の姿が現れる。その姿はどこにでもいるような少年の服装だが、顔には目出し帽を被っていた。

「無駄口が過ぎたな。声で場所が丸わかりだ。さてと……」

「うづく……」

「無駄な抵抗は止せ……俺の能力は力任せじゃどうにもできない」  
呻き声を上げながらも、何とか立ち上がるうとする通り魔に対して久遠は静かに冷たく言い放つ。

「……そ、それが久遠君の能力?」

今まとは違う雰囲気久遠に恐る恐る空音が訊ねる。

「そう、さっき説明した通りだ。空音、スタンガン貸して」

「え、どうして?」

通り魔に接するようなトゲトゲとしさは無くなったが、冷たさは消えていない。そんな久遠にスタンガンを貸すべきかどうかを悩む空音。

「こいつを一旦気絶させる。そうしないとこいつから目が離せないから」

皆の手当てもしないとな、という久遠の言葉に空音は少し

安心する。

「……はい」

「ありがとう」

「ひっ……く、来るな！」

空音からスタンガンを受け取った久遠は通り魔の下へと歩いていく。

通り魔が怯えた声を出す。

「そう言った被害者たちにお前はどうしたか思い出せ。そして猛省しろ」

「あぐっ！」

バチツという音と共に通り魔が気絶する。

「……こいつどうしようか？」

「……CCPに引き渡すのが一番じゃないかしら……」

今までとは一転、自分の知る久遠の雰囲気に戻ったことで、空音は場にずっと張りつめていた緊張の糸が切れたように感じた。

「CCPの電話番号わかる？」

「ええ」

「ならちよつと報告してくれる？ 俺はみんなの介抱しておくから」

「わかったわ」

CCPに空音が電話をかける姿を尻目に、久遠は一番重症そうな優月の下へと歩み寄る。

「大丈夫ですか？」

「う、ん……どうかな？ ちよつと肋骨ろっこつに罅ひびが入ってるかもしれないや」

意識はあるようだが、優月の顔は痛みで歪ゆがんでいる。

「救急車を呼んでおきますんで、少し横になってた方がいいですよ。犯人も捕らえましたし」

「うん……そうしておくね」

久遠の言葉に安心したのか、優月は目を瞑つぶり意識を落とす。その姿を確認した久遠は優月の殴られた部分に手を当てる。

「……………」

「セクハラか？」

すると、背後から春日の半ば茶化すような声が聞こえてきた。

「違います。どうも肋骨に罫が入ったかもって言っていたので確認です。春日先輩の怪我は大丈夫ですか？」

久遠はその言葉にまず否定して説明をした後、春日の心配をする。その様子に春日は苦笑しながら答える。

「優月に比べれば大したことねーよ。他の奴らもとりあえず平気だ」

「それは良かったです」

「それにしても………… お前すごいな」

安堵の溜息を吐く久遠を見て、春日は思わず賞賛の言葉を贈る。

「別に………… こいつの詰めが少し甘かったただけですよ」

「そうは言うが……………」

久遠の謙遜に春日が言葉を返そうとするが、そこに空音が携帯電話話片手に割って入ってくる

「久遠君、CCPの課長があなたと直接話したいそうよ」

「俺と？」

久遠が頭を傾げながら訊ねると空音が頷いて携帯電話を渡す。久遠はそれを受け取り、通話口の向こうへと声をかける。

「はい、上倉です」

『よう、久しぶりだな。久遠』

携帯電話からは久遠にとって聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「…………… どちら様ですか」

『おいおい、俺だよ俺』

「俺さん、ですか…………… そのような名前の人を知り合いに持った覚えはないんですが」

懐かしい声に久遠は昔を思い出して微笑する。

『つまらないボケかますな、ドアホ！ 今からそっちに迎えを寄越すから通り魔を連れてくるついでに顔見せに来い』

「わかったよ、えーっと…………… 課長殿」

「なっ、お前もしかして俺の名前忘れ」

「ブツッと携帯電話の通話を切る久遠。」

「携帯ありがとな」

「……どういたしました」

久遠と課長のやり取りを不思議そうに見ていた空音に携帯電話を返す久遠。そして、苦笑いをしながら空音に訊ねる。

「……あのさ、課長の名前って何だっけ？」

「え？ 課長の名前は」

空音の言葉に久遠は目を見開く。

「それって……」

「ええ、久遠の想像した通りだと思うわ。世間は狭いのよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9673y/>

---

過ちのライゼ

2011年12月8日00時55分発行